



始



598



山陰



時 213
377



歴史小説
安土・桃山

織田信長

(四)
岐
阜

鷲尾雨工



織田信長 岐 卓 第四卷 目次

熊野詣	3
暗双	21
堺見物	39
大坂の起源	71
入京第一日	93
鎗車	117
暴逝	136

織田信長 (第四卷)

岐 阜

鷺尾雨工

結 婚 網	四 隣 の 群 雄	岐 阜	畏 み て	猿 の 出 世	墨 股	伊 勢 を 扼 す
.....
388	356	336	300	282	228	166

装幀・挿畫……………名取春僊

熊野詣

(一)

「猿。又左を呼べ」

「呼んで来るだけで、宜敷いのですか」

「むだ口を利くまに、呼んで来い」

「猿の格上げは未だでせうか？」

「なに？」

「又左殿は、犬から昇格したやうですが、猿の方は、一向どうも、はい！」

「なアんだ手柄も無い癖に」

「その代りには縮尻も無いです」

「縮尻つて見ろ、勘當するから」

信長は莞こりともせず云ふと、

「一度は勘當された方が、よきさうですね。眞赤なお猿のお尻を一つ、縮こめますかな」

と、猿面草履取の藤吉が、尻ツぶり腰に、軀をよぢらせて、變な手つきで尻のあたりを撫でた。

「呼んで来いと申すに！」

「はい。どうもその方が、睨みが利きさうです。縮尻つてから出直す方がですよ」

「え、立たんかッ！」

「お急ぎですか？ そんなに」

「いそぐ」

「初めから、さう仰有ればいゝに」

藤吉が、前田又左衛門利家を呼んで来たのは、おやツと思はれるほど速かつた。

利家は、本丸に出仕してゐたからでもあつたが、それにしても速かつた。徒口の埋め合せをしても釣銭が来さうであつた。

釣銭といへば、ちやうど、信長の用事も金銭に關はつたことだつた。

「土藏から、金銀と、永樂錢を、運び出して荷造りをさせろ」

と、信長は、持ち前の間敷から棒で、叩いた。

「荷造りを致すので御座りますか？」

桶狭間の戦場の手柄によつて、勘氣を赦された利家は、犬千代の時分と同じやうに、主君の寵愛をとり戻してゐた。

だが然し、信長から寵愛されるものは、口汚く罵られることを、覺悟しなければならぬ。愛すれば、愛するほど、呶鳴るのだ。

「馬鹿野郎ッ！」

と、信長は呶鳴つた。

荒子の城、二萬三千石の若も、足輕も、仲間も、下郎も、ほとんど區別なしに呶鳴るのが、信長なのである。

「は！ どんな具合に、荷造りを致しませう？」

「馬鹿野郎ッ！」

「は！」

「荷といふものは、搬ぶものだ」

「は！ では搬びよい様に造らせませう」

利家は、何處へ搬ぶための荷造りかも聞きたかつたが、やめた。

そして、退ると、信長は、奥へ遣入つて行つて、夫人へ、
「旅をして来るよ」
と、云つた。

「あアら？」

「二箇月くらゐ」

「まあどちらへ？」

「遠方だよ」

「遠方と仰有いますと？」

「遠い所だ」

「遠いだけでは、雲を掴むみたいで御座いますわ」

「雲の向ふだよ」

「ええ？」

濃姫夫人は、美しい眉をひそめた。

戦國時代の旅行は、まったく容易なことでは無かつたのである。

(二)

「知つてゐるか？ ぬけ詣といふことを」

「ぬけ詣——で御座いますか？」

「さうだよ」

と、信長は薄ッすら微るんだ。

「社や、お寺などへの、ぬけ詣なら、存じてをりまする」

すこし、切口上で、夫人が答へた。

「それだ」

「貴方が、どこぞへ、お詣りあそばすので御座いますの？」

「此方だつても、お詣ぐらゐするよ」

「去年、桶狭間の御出陣に、熱田へお詣りなすつたことを、仰有るのでせう？」

「人に知らせず、ごく窺りと詣るのが、抜け詣だ。妻女房にも知らせずに詣るのが、本間だ」

「それは、存じてゐると申しますのに——」

「たけど、あんなに公然に詣つた熱田のことなどを、持ちだすから、存じてゐるなんて云つても、心細いよ」

「あら、お心細いなどと、ほんたうに、何を仰有るのやら……」

「熊野だよ」

「え、熊野ですツて？」

「なアんだ熊野を知らんのか、熊野を？」

「そんなら熊野へ、お詣りあそばすの？」

「遊ばすのだ」

「あれ。眞實で御座いますか？」

「どうにも、眞實とは思へなかつたのだ。」

「おい、訊くことがある」

と、信長は云つた。

「あら〜」

「其方へ、いつ俺が偽を吐いた」

さう云はれてみれば、成程、つひそ一度も良人は、自分に、偽りを云つた例が無かつた。



信長は、いつも結論を、最初に云つてしまふ癖があるから、初つ鼻は五里霧中に、引き摺り廻される。したがつて、眞實のことでも大抵、ちよいと聞いただけでは、嘘みたいな気がする。

「でも……」

と、濃姫夫人は、嬌やかに首を傾げた。

たゞ自烈すだけで、嘘は云はぬ良人と解つてはゐても、熊野詣と良人とは、どうしても、結びつか
なかつた。

夜の燈火は、美しい夫人の顔を匂やかに照らしてゐた。

夫人の居間には、しつぱりと蘭麝の香が立ちこめてゐて、それが、信長の嗅覺を、まことに心地よく刺戟する。

「でも——怎うしたと云ふのだ？」

「……」

夫人は、答へなかつた。

室内は、夫婦ふたりきりの筈だつた。

ところが實は、さうでは無くて几帳の蔭には、人が一人、忍び匿れてゐた。

むろん、信長夫妻は知らなかつたが、さつきから盗み聞きをしてゐるのは、夫人の侍女で——照葉

と呼ばれる女だつたのである。

(本當か知ら?)

この侍女も、やはり、信長の熊野詣を、眞實とは思はなかつた。

(そんなことが、どうして信じられよう?)

照葉は、心の奥で、呟かすにはゐられないのであつた。

だが、それにしても、何のために几帳の蔭などに潜んでゐるのだらう? 若い女性の好奇心から、

主君夫妻の睦言を、ふと忍び聞かうといふ氣になつたのであらうか?

(三)

信長は、

(おれも今年は二十八になつたから、濃姫の奴も、三十を一つ越したことになる。女が三十一といへば、相當ひねたわけだが、ひねた割に、くすまんののは、産ます女の利やくかも知れん。吉凶禍福は、あざなふ繩の如しといふやつで、何が仕合せになるか解るものでない。子を産まないのは、女の不仕合せに違ひないけれど、いつまでも若くて、綺麗で、色ツぱく過せるとなれば、不仕合せが、不仕合

せでなくなつて、幸福の領分をも自分のものにして行ける。訝しなものよ」と、思つた。

(けふ日では、どうやら俺の方が五つ六つ年嵩に見えさうだ。と、すれば、實際の歳の違ひの三つが消えて、そのうへ反對に、五つも俺より若く見えるのだから、合計八つも歳を喰ひ匿してゐることになる)

そんな具合に、考へながら、口では、

「紀伊の國の熊野三所權現に參詣することを、むかしから熊野詣とも、三熊野詣ともいふ。熊野の山には、熊野坐神社、熊野速玉神社、熊野那智神社が、大昔の、そのまた昔からあつたのだ。本宮といふのは、坐神社のことだし、新宮といふのは速玉神社のことだ。それから那智は、夫須美社ともいつて、本地垂迹の説から云へば、十一面千手觀音だよ」と、云つたものだ。

「まあ、お詳しいこと!」

濃姫夫人は、ほんたうに案外だつた。

良人が、まさか本地垂迹だの、十一面觀音だのと云ひ出さうとは思はなかつたのである。

「新宮は藥師如來だし、本宮は、阿彌陀佛だといふのだ!」

と、信長は附け足した。

夫人の、意外さうな顔つきを、面白げに眺めて、

「靈驗があつたのだらうよ。じつに信仰が盛んで、白河上皇は十度、鳥羽上皇は二十一度、後白河上皇は三十四度、後鳥羽上皇は二十八度、御幸あそばされた。まつたく驚くべき御幸の度數だ。それはどだつたから、公家の信仰の篤かつたことはいふまでもないし、平家一門の熊野尊崇と來たら、熱が高すぎて、正氣の沙汰では無かつたよ」

さういつたので、夫人は、ますます呆れ顔で、

「御先祖の御信仰が、篤かつたから——それでこんなに、急にお詣あそばすことになつたので御座いますか?」

「おれの御先祖は、平家では無いよ」

と、信長は答へた。

「あら!」

夫人の表情に、微笑が泛んだ。

良人が、平家の後だといふことを、否定したので、この調子では、熊野詣は冗談にちがひないと思つて、

「そんなら源氏でいらつしやいますの？」
と、云つた。

「源氏でも無いよ」

「あらまあ！ 平家でも、源氏でも無いと仰有いますと……？」

「越前の何處かの神主だとも云ふけれど、先祖のことなんぞ、怎うだつて宜いのだ」

「熊野へさへ、お詣りになれば、それで宜いので御座いますか、ほッほッ……」

と、濃姫夫人は、艶みづしい嬌笑ひを洩らした。

(四)

「さうだよ。熊野へさへ行けば、宜いと云ふことにしてた、實は熊野へは行かないの」

「あれ！ 何で御座いますつて？」

「熊野へなんぞ、俺が行くかよ」

と、信長は、けろりとした面持で云つた。

「それ御覽あそばせ！」

濃姫夫人は、可笑しくもあれば腹も立つた。

「見ろとは、何を？」

「嘘をお吐きになつたでは御座いませぬか」

「吐くものか」

「あアら、熊野詣は嘘だつたので御座いますものを」

「莫迦め。熊野へなんぞ行くものかと、云つて聞かせたではないか本當のことを。——濃姫。そなたには匿す必要が無いから云ふが、熊野詣は見せかけの、いはゆる看板といふ奴だよ。擧げた看板は無ろん偽りで、その實は、京都見物だ。ぬけ詣りではなくつて、ぬけ上洛だ」

さう、信長が云ふと、

「おゝそんならお忍びで、上洛なさいますの？」

濃姫は、たしかめるやうに訊いた。

「さうだよ」

と、信長が頷くと、濃姫夫人も頷き返して、

「それならば、何も申すことは御座いませぬ。たゞ、お長旅の御無事を祈るだけで御座いまする」と、云つた。

だが、信長は微笑して、

「とは云ふものゝ、それも看板の口かも知れんな」

「あら？」

「腹のなかでは、いつ美濃攻めをするのだ、弔ひ戦を、また後廻しにして、悠長らしい上方見物なんぞ、聞いて呆れる——と思つてゐるのだらう？」

「まあお酷いこと、わたくしが何でその様な不足がましいことを、考へませう？」

「さうか。不平がないなら結構だ」

信長が、さういつた時、几帳の蔭では、侍女の照葉が、嬉しさに躍る心を、ちいつと抑へて、息を凝らし続けてゐるのであつた。

(あゝ何といふ素晴らしい秘密を！)

さう、思ひながら猶も耳を澄ました。

それから半晌ほど後のこと——

館の建物の裏手で、一人の足輕と囁き合つてゐたのは、この照葉だつた。

四邊は暗い闇であつた。

「伴助どの、ほんたうに神佛の、御加護でござんしたぞえ！」

と、照葉が云つた。

「いや御手柄々々！ 神佛のお助けも、あつたか知れぬが、畢竟は、そもじ殿の、健氣なお働きぢやよ。稲葉山の屋形、義龍様が、どんなにお喜びで御座らう。あゝこの胸が、わくわくする！」

「これさ伴助殿、嬉しがるのは後のことぢや、さあ一刻も早く！」

「おゝ合點だ！」

闇の中での囁きは、終つた。

足輕伴助は、美濃から入り込んでゐた間諜、友野伴助だつた。

そして照葉も同様、織田の機密を探るために三河者と偽つて、老女の各務野の部屋に、三年前前から奉公してゐた女だつたのである。

(五)

熱田から、海上七里の渡し。

桑名に上陸した信長一行は、その日は四日市に宿つた。

馬も一緒に、渡したのであつた。たゞし、乗馬は、信長ひとり。愛馬「迅風」の他は、みんな小荷

駄馬だつた。そして荷物の大部分は、金銀と永樂錢の箱詰、および袋詰めであつた。ちやうど三十名の家來が、すべて徒歩で供をした。

だから、誰が見ても、これが桶狭間で今川義元を討ちとつて、その名が宛ら青天に轟く、雷のやうに世の人々を愕かせた新興織田氏の當主とは見えない。

「これが信長だ！」

と、さう云つて聞かされても、

「まさか」

と、首を振つたらう。

どこぞの大商人の回送貨物が、なにか貴重品であるため、途中の盜難や掠奪を怖れて、野武士の團にこの荷物の宰領を頼んだ——といふ形なのである。

四日市に一泊した翌日、一行の一番先に立つて馬を進ませる信長へ、

「殿つ、違ひますッ」

と、猿が叫んだ。

「違はん」

と、信長は云つた。

「いゝえ大違ひ！ そつちへ行つたら大變です。東海道です。龜山路です。鈴鹿峠へ、行つてしまひますッ」

さう、喚きながら、猿は馬の鼻先まで走つて行つて、轡を取つて引き戻さうとした。

「構はん、鈴鹿峠で構はんのだ」

「構はんことがあるのですかッ？ 鈴鹿を越せば江州です。熊野が江州にあるかッてんですよッ」

今もつて、猿からも草履取からも、一向昇格しない藤吉は、言葉も矢張、依ぜんとして粗ざいだ。

「無くつても構はん、離せ」

「そ、そ、そんな亂暴なことが、あるもんですか、熊野は紀州です。南の方ですッ！」

と、猿は吠鳴つた。

前田又左衛門、池田勝三郎、その他の家來たちは、たゞ茫然と立ち止まつてゐた。

「わはッはッー」

と、信長は笑つて、

「熊野は紀州だが、能褒野はそこだ。すぐ其處だよ」

と、云つた。

すぐ其處だと云ふ能褒野は、日本武尊の白鳥陵のある場所だ。

供の家來は誰も彼も、熊野詣たとばかり思ひ込んでゐたから、呆れてしまつた。けれど信長は、むろんお構ひなしで、さつさと陵さして馬を進めた。

白鳥陵の参拜を済ますと、家來どもは、今來た路を引ツかへすものと思つた。

ところが、案に相違。

信長は、鈴鹿峠の方へ向けて、さつさと進んで行く。

(變てこたなあ！)

(訝しいを通り越す！)

だが、信長は、龜山を通り越してしまつた。

(面妖すぎる！)

と、思つても、家來どもは供だから跟いて行くほか無い。——やがて日暮た。

關に一泊。

翌日は、鈴鹿峠。

暗

刃

(一)

東海道を、伊勢路から鈴鹿峠を越せば、近江路の土山、大野、水口、石部の宿。

こゝは石部の宿である。

旅舎が何軒か並んでゐる其の一軒の、奥座敷に陣どつて、車座になつて、鱈腹つめこんだ食後の腹ごなしとでも云つたふうに、とり留めもない雑談に、笑ひ興じてゐる十人ばかりの武士があつた。

どれもこれも究竟な面構へと、巖丈な體格を持つてゐて、しばしば戰場も往來したし、果し合ひや刃傷なら、人の喧嘩でも買つて出ようといふ輩に違ひない。

燈が、酒ぼてりの顔を照らす。

どの顔も、赤々と輝いてゐる。

「愕いたよ全く！」

「なにをさ？ 不死身の貴公でも、愕く事があるのか？」

「馬鹿云へ。なんぼ不死身だつて呆れもするし、愕きもする、土臺膽ツ玉といふものは、上つたり下つたりする様に出來てゐるのだ」

「はッはッ、左様か左様か！ それで貴公の膽ツ玉をだ、上げさせたといふのは、一體なんだ？」

「こん公だ」

「なんだ、こんこうとは？」

「狐公だ」

「そのこんこうが解らんのだ」

「鈍いのう。隣りよ！」

「あゝ成アる程、隣りの大將か」

わきから、

「おい、大きな聲を出すな。うちの大將に叱られるぞ」

別のが、

「大丈夫、隣の宿とは一丁も離れてゐる」

他のが、

「さうともく」

と、云つた。

「信長が、どうしたと云ふんだ？」

「相變はらずの狐馬だと云ふのか？」

「だから愕いたよ全く……」

と、前のが、繰返した。

「だから何をさ？」

と、次のが、また訊き直すと、

「昨日の朝、おれは獨で先廻りをした。おぬしらが、グウグウ酒臭い鼻をかいてゐる最中に、おれは

睡い眼をこすりながら、四日市の宿屋を出掛けたのだ、いゝ加減辛かつたぞ」

「そんな事は聞かなくなつて、解る」

「おれは獨で先廻りをした」

「なんと同じ事を云ふ？」

「黙つてゐろ！ 俺は先廻りをして——」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「おい、又か。よして呉れ」

「岐れ路の路傍で、見張つてゐたのだ。たゞ突立つてゐたんでは、恰好が附かんによつて、握り飯を食つてゐた。朝飯を抜きにして宿を出たから、腹も空つてゐた」

「かう止し給へ！ 貴公の腹加減を聞いてゐるのではないぞ」

「バクついてゐると、やつて来たよ。驚いたことには、信長の供の家來どもさへ、本當に知らなかつたのだ」

「何を知らなかつたのだ？」

「熊野をさして行くものと、みんなが思ひ込んでゐたのだ。實に呆れたものよ。なにも、そんなにまで匿して置かすとも、ではないか。岐れ路の、どたん場まで来てさへだ。腰巾着の猿面までが、知らなかつたからなあ！」

「まさかー」

「だから、膽ツ王が、上向きになつたのだ」

(二)

「へえ、ほんたうに知らなかつたのか？」

「本當とも、猿面が變竹林な聲を張り上げてき、違ひます、路が違ひます、熊野は紀州だと、馬の轡を引き戻さうとすると、どうぢやい！」

「どうした？」

「狐ちき公がよー」

「む、信長が？」

「云つたことには」

「熊野詣は罷めにした？」

「そんなんぢやあ無い。熊野は紀州だけど、能褒野はすぐ其處だと來たのだ」

「一向、面白くも可笑しくもないの」

「チエツ血のめぐりの悪い奴だな」

「若い女ぢや有るまいし、我輩は血の巡りは悪いよ。能褒野といへば、陵のある所ぢやないか。狐ちき公も地理にあ却々、明るいに見えるて。なるほど東海道と伊勢路の追分からは、すぐ其處だよ能褒野は」

「聞いてから喋舌れ。話は、これからののだ」

「さう勿體ぶると、前の方を忘れツちまふ」

「厄介に出来とるな。狐ちき殿曰くぢや、能変野から褒の字を除つて、チヨンくチヨンくと、點を四つ附ければ熊野だから、なにも遙々紀の國の、南の果まで行くには及ばん、とさ。わはッはッはこれでも可笑しくないと云ふか？」

「は、褒の字を除つて、チヨンくチヨンくか、違ひないね、面白いな」

「それ見ろ、可笑しかったら頭を下げろ」

「我輩、可笑しいとは云はんぞ」

「貴公、笑つたではないか」

「笑つたにしてもだ、可笑しいとは限らん」

「ふ。強情だな」

「呆れたもんだよ、氣が知れんの」

「ほ。信長のことか？」

「當り前だ」

と、云つた時、

「キヤーツー」

「アレイツー」

ドクばた、ドド、ばたばた、パターン と、襖が軋んで、外れて倒れて、破れ壊れる音に混つて、若い女の叫ぶ聲、喚く聲―だが然し、悲鳴は悲鳴でも、斬られたり突かれたり、殺されかけたりしたやうな、そんな切端つまつた聲ではなくて、だいぶ餘裕のある聲であつた。それは笑ひ聲をさへ交へてゐた。その女たちの叫び聲が、男共の、我武者羅な濁み聲や銅羅聲と絡んで、忽ち大變な騒ぎ―

「あれもう厭な……」

「えひひひ、」

「もう怪體な―」

「ふふ、えげつない事があるもんか、これさこんな、えげつが有るわさ―」

「あれもう放して、いやらしい―」

熊みたいな髭ツ面が、ぼつちやりとした女の頬ツべたへ、こすりつく。向ふ傷の物凄いのが、抱きすくめる。逃げようとして藻掻く、ひつ掻く。噛みつく。喰ひつく。

女共は、この宿、堅木屋の女中連だつた。

夜食の酒肴を運んで来たところを、いきなり捉まへられたのである。

「こらこら何を騒ぐしい」

と、窘めたのは、丁度その時、離れ座敷から出て来た梅津玄旨齋であつた。

(三)

——美濃武士の劍は、玄旨齋によつて強し——と、云はれてゐる程の、その梅津玄旨齋であつた。

「醜態ではないか！あまりといへば、だらしな過ぎるぞ」
炯々と輝く瞳。

もはや餘程の老齡だが、技で鍛へた體は、なほ壯者を凌ぐの趣があつた。

越前は一乗谷に發祥した劍の名流、中條流の流れを汲んで、更に自ら工夫を凝らした玄旨齋の太刀の鋭さは、近國無双の譽れが高かつた。

「何んと云ふ不仕釋ちや。時もあらうに今こゝで、飯盛女に巫山戯散らすとは、それでも選ばれた武士か？」

「師匠ッ！」

「玄旨齋殿ッ！」

「慎しめ！」



「しかし、時もあらうとのお言葉ながら、いまなればこそ、また——こゝなればこそ、かくは巫山戯も仕つた！」

「左様！ 畢竟は敵を欺く手段で御座る」

「馬鹿を申せッ！」

玄旨齋は、睨みつけた。

と——そこへ、同じく離れ座敷から出て来たのは、小牧源太、長井忠左衛門、牧村丑之丞。

三人とも、剣をとつては、聞えた猛者。いづれも、玄旨齋の高弟だ。なかでも小牧源太は、長良川の川畔で、山城入道道三の首をとつた事で一層、その名が現れたのであつた。

「何事で御座るな」

と、小牧が訊いた。

玄旨齋が、

「不埒ぢやよ」

と、苦笑ひをした。

小牧は、悪巫山戯をした連中を、ハッタと睨めつけて、

「大切な使命を忘れたのかッ！ ふやけると、斯く云ふ源太が、容赦せぬぞ」

怒鳴ると、熊野と能褒野の話をしてゐた男——串本権八郎が、

「おれも、我輩も、勘辨がならんぞッ」

と、巫山戯た朋輩へ向けて叫んだ。

——几帳の影で、信長と濃姫の會話を盗み聞いた間諜の照葉は、時を移さずに、同じく美濃の間諜として入り込んでゐた友野伴助を稲葉山へ走らせた。伴助は暗を衝いて、その夜のうちに信長の秘密を、齋藤館の義龍へ告げることが出来た。義龍は、これを天與の機會、のがすものかと、跳り上つて喜んだ。そして早速、梅津玄旨齋に命じて、信長の後を追はせることにした。玄旨齋は小牧、牧村、長井以下十數人の門弟を選んで、引き連れた。即刻、稲葉山を立つたのである。そして、信長一行が四日市の宿に泊つた時、早くも追ひついたのであつた。

で、信長一行が、關に宿れば、玄旨齋の一團もまたそこに宿り、鈴鹿を越せば、同じく峠を越し、土山、水口と過ぎて今夜は共に石部の宿に宿つたのである。

信長一行の宿は、甲賀屋と呼ばれる旅籠屋だつた。——この堅木屋からは、二町とも隔たつては居い。

玄旨齋が、

「まだ飲み足りないのか。さう煽つては覺束ないぞ」

と、云つた。

叱られても、敷鳴られても、天邪鬼——また飲みはじめてゐるのだつた。

(四)

「ツツ」

申本権八郎が、暗の中で、ツツと躡つた。續く四箇の黑影が、ひとしく地に匍つた。すこし離れた往還に、提灯の火影が見えたのである。

だが、それは何でもない里人の通行らしい。ほんの普通の世間話が、寝静まつた四邊の静かさに響いた。——やがて、

「おツそろしく物騒なお侍衆が、さも迂散くささうに堅木屋さんに、宿をとつたと思ふと、すぐまた後から大勢の、お武家衆が、これはまた恐ツそろしく嵩ばつた荷物と一緒に、甲賀屋さんへ泊り込んだぢやないか。さあ大變、こりやあきつと、何かしら間違ひが起るに違ひねえ、間違つても、間違はねえでも、騒動がおつばじまつて血の雨が、降るだらうと、おらア案じごとをしたんだが、どうもかう静かぢや當て事が、おつばづれたらしいよ」

「はツはツツそんな當て事なら、外れた方が、どの位、結構か知れアしねえ」

「それあ、結構にア違ひないけれど、何だかどうも少つとばかり、張り合ひが抜けちやつた」

「物騒な男やなア」

申本を眞先に、犬上吾助、川村瀨左衛門、倉持與五郎、和田傳藏——かなり飲んでゐるが、酒豪揃ひ。選まれた劍士だから、劍に強いのは云ふまでもなからうが、酒の強さは或はそれ以上だつたかも知れない。

みな、がつちりと、丹田に膽をする、餌をねらふ山猫のやうに、足音を忍ばせて、甲賀屋の庭に潜入したのは、間もない事であつた。

申本が、

「開ける！」

と、犬上の耳へ囁いた。犬上には堪能な忍びの術があつた。音もなく戸が、外された。犬上だけでなく、他の四人も多少の術はあるらしく、眞暗がりの中でも、物の見分けがついたのであらう。引抜いた白刃の尖を壁にも、戸障子にも、問へさせずに、廊下を彎曲りか曲つて、つひに一番奥まつた座敷の外側へ、辿りつた。

「こゝだ」

犬上が、申本へ私語すると、申本が、大刀の櫓を握つたまゝ、四つん匍ひになつて、座敷の中へ匍ひ込んで行く。

間をすかしてゐた忍術の犬上が、後ろから、

「それッ、そこだッ！」

と、叫んだ。

叫んだ途端に、四つん匍ひから跳ね起きた申本——白刃の櫓を握り直して、

「ええつッ！」

大喝一聲、叫びざまに土壇の上の据物を、真二つに斬るがやうに、夜具の上から斬り下ろしたのであつた。

夜具の下に寝てゐたのは、潜入の刺客共の察見どほり、誤たすそれは信長、その人であつたが、

(損ねたッ！)

斬つた手答へは、人間の體ではなかつた。

犬上が、

「逃げたぞッ！」

さう、喚いた時、壁際で、

「又左ア！」

と、叫んだのは信長であつた。

びつたり壁を背にあてゝ、間にも著き大左文字を、ひき抜いてゐた。

(五)

信長が、又左を呼んだ叫び聲は、當人の前田又左衛門の耳へ聞えるよりも、猿の耳へ、一層びんと響いた。

それは、猿の方が、又左よりも熟睡してゐなかつたせゐではなかつた。ぐつすと白河夜舟で、舳の櫓聲が高かつたことは、殆ど同様だつたが、寝てゐても、覺めてゐても、信長の聲を聞きつける事にかけては、まさしく猿面藤吉は天才であつた。斷然他人よりも、敏感だつたのである。おまけに、主君の臥つてゐた室の入口の襖外に、すぐ唐紙にくつつけて寢床を敷いてゐた。

「又左ア！」

と、猿が呶鳴つた。

咄嗟の事だから、むろん譯はわからなかつたが、只事ではないと感じて叫んだのである。そして、

叫びざまに、枕刀を押ツ取つて、駆け入らうとした途端、

「賊だツ、曲者だツ！」

再び信長の聲。

(さ大變つ！)

と、思ふと一緒に、また、

「又左ア！」

めりめりメリツと、襖を、蹴倒し、ふみ越えるのと、刀を抜くのが、同時であつた。

だが、その時早く、クアツと、躍り込んだのは、又左であつた。

「ぎやあーツ！」

悲鳴は、斬られた犬上吾助。

——斬つたのは、前田又左だ。

もちろん、猿も、こゝ懸命に闇のなかで、刃を振り廻した。しかし——銚は空に流れて、響へはなく、あべこべに自分の身に、サツと迫る刃の殺氣！

思ひきり後ろへ、

「たウ！」

と、反つて躲した時、

「危いッ！」

さう、叫んだのは、池田勝三郎。

又左と枕を並べて眠つてゐた彼は、今、猛然と躍り込んで来たのである。

メツと、火華が飛んで、大左文字の刃が、鏘然と、響きを爲した。

——それは、刃を合せた串本権八郎の太刀が、鏗元から、折れた音でもあつた。

(馬鹿ばかしい！)

さう思ひながらも、信長は、大左文字を、逆に返して、斬り返した。

串本は、強かに利腕を斬り離されて、よろめく所を、又左の車斬り。薙がれて、たまたま、どつと倒れる。

「殿ッ！」

と、猿が喚いた。

信長が、

「引込め、引込め！ そちの出る幕ではない！」

と、云つた。

ちやうどその時、燭を引摺んだ侍が走つて來た。

信長は、曲者の利腕を斬つた大左文字を、ぶら下げたまゝ、次の間へ、

「猿め引込めと、申すに！」

さう、云ひながら、さつさと自分が、まづ引込む。

と——入り違ひに、白刃を抜きつれた家來どもが、跳び込んで行つた。

灯影に、血煙が見えた。

池田勝三郎が、刺客の一人の、倉持與五郎を斬つたのだ。

「斃ばれ！」

と叫ぶ、又左の聲が響いた。

堺見物

(一)

茅渚の海——いま謂ふ大坂灣は、早春の明るい日差をうけて、瑠璃色に耀いてゐた。

じつに美しい瑠璃色であつた。それは全く、五彩を鏤めたやうな、複雑な瑠璃光の含まれてゐる色だつた。

「綺麗な海だな」

と、信長が云つた。

「ひやあア素敵々々いッ！」

と、猿が、奇聲を發したので、又左が笑つて、

「はッはッは、猿の嬉しさうなこと。初めて海を見た者のやうに！」

「又左殿は何が可笑しい？ 初めてですよ、こんな海は。熱田や桑名や東海道の海とは、名前は同じ

海は海でも、海が違ふ。憚んながら、堺港の海だ！

猿は、口を衝ツ尖らせた。

「は、憚んながらと、おいでなすつたね。莫迦に威張つたものだな」

又左衛門利家が、さう云ふと、池田勝三郎たちが、哄と笑ひ聲を立てた。

「な、なにが可笑しくて笑ふのだツ！」

と、猿は、自分の家來でも叱るみたいに、嗚りつけて、

「あれを能く見て、頭へ入れて、ちいつとやそつと、考へてから物を云ふもんだ」

指さす彼方には、帆柱を林のやうに連ねて、大船小船が、何百艘といふ數も知れぬほど、船繋りしてゐるのであつた。

勝三郎が、

「おれは物は云はなかつたよ、笑つただけだ」

「考へてから笑へと云ふんです」

「何を、怎う考へたら宜いのだ？」

「あれだけの、おびたらしい船がですね、どれだけ金目の物や品を運んで來たか、また、どれだけ値打の物や品を積んで行くか、それをですね、ちつくらとでも頭中に置いたら、成る程、海は海で

も海が違ふわいと、感心出来る筈ですからね、笑ひ事ではない筈だ。ほんたうに、これしきの事が解らんやうでは、あまりといへば情無いぢやないですか。折角かうして京都も奈良も後まはしの、素通りにして、いの一の番の、初手ツ鼻に、見物にやつて來た場所の、この堺港が、それぢや泣かうといふもんです」

べらべらべらと一息に、捲くし立てる。

「よく喋舌るなア」

と、信長が、

「石部の宿で、枕刀を、空ツぶりが、何より證據の手の方は、半丁前にも足りないけれど、口は八丁、額八丁、合はせて十六丁といふ奴だ、わはツは、ハ、ハ、ハ」

上々の機嫌で笑ふと、

「てへエ違ひますよ殿つ！ 手の方は三十二丁でさあ」

「なに、三十二丁だと？ どういふ勘定なんだ？」

「三十二丁が、お解り憎けりや、三十二相だ」

「なほさら解らん」

「弱つたな。船の三十二艘とは違ひますよ殿！」

「誰が船だと云つた？」

「船ならあすこに何百、何千と浮いてますけれど、こちらは三十二相——かね備はつた手長猿です。だが悲しいことには、毛が三本足りません。一里に四丁足りんのが、三十二丁ですよ、穴賢！」

「ちえ、おたんちん、引ッ叩くぞッ！」

(二)

左の方は、高師の濱であつた。

いまの濱寺、高石、岸和田と続く海岸なのであるが、當時は謂はゆる白砂青松、渚遙けく、つらなる末は春まだき、乳白色に霞み渡つてゐるのだつた。

そして右は、浪華の浦。

住吉、天王寺の岡の彼方は、木津川、安治川、淀川の川尻で、昭和の現代では大阪市と堺市の間を流れて海に入る大和川さへもが、そのころは、北へ流れて、淀の大川と、その川尻を合はせて本願寺の本據、石山の御堂と、門前街とを、繞り繞つてゐるのであつた。

だが、信長主従が、いま立つてゐる場所からは、石山は、丘陵の陰になつてゐて見えなかつた。

たゞ微に、

(あの邊だらう)

と、思はれたのは、何となく空の色に——地平線に近い空の色合に、人煙の稠密さが感じられたからである。

石山は、眞宗の本山だつたのみならず、最も大きな城であつたし、同時にまた、極めて殷賑な都でもあつたのだ。

で、信長の旅の豫定表の中には、

——堺港——石山——

と、書かれてゐた。

もちろん、そんな豫定を、紙に書くやうな信長では無かつた。頭の内部に記されたプログラムなのである。

「又左」

「は」

「そらは、あの大船どもが、何處から來た船か知つてゐるかな？」

信長は、さう訊きながら、何を想ひ出したものか、目を、港の方から反らして、石山の方角へ向け

て、ちよいと思案顔をしたが、

「殿」

と、又左が云つたので、

「何だ？」

「おや。お訊ねになつたでは御座りませぬか」

「何に？」

上の空で、訊き返して、

(結局は一番手剛い大敵かも知れん！)

さう、心に呟いた。

信長は、他日、中原へ乗り出した曉に、石山の本願寺と、大いに戦はなければならんといふことを、ふと考へたのであつた。

だが、それは決して、突拍子もない空想の現はれでは無かつた。

それが頭に泛んだことには、ちやんと脈絡があつた。

——どんな脈絡かといへば、

——これだけ繁華な、富の力の充實した堺港といふ大都會。

——外國の物資を、ふんだんに輸入出来る日本一の開港場。大きな倉庫が軒を並べて、貨物を貯蔵する設備の整つた貿易港。

——この港と、石山とは、三里しか離れてゐない。

——堺の力は、石山によつて十二分に、利用されるだらう。堺を兵站部に出来る石山本願寺の勢力は、どんな大々名よりも、強いに違ひない。

と、信長は思つたのである。

「殿、どこの船かと、仰有つたやうで御座りましたが？」

又左が、さう云ふと、

「さうかな？」

信長は妙な微笑を洩らした。

(三)

「どうも變で御座りますな」

「どうも變だよ、あんまり先のことを考へ過ぎる。これでは笑ふだらう。笑はれるよ」

「え？ 笑ふとは、誰が笑ふので御座りますか？」

「鬼だ。鬼に笑はれるのだ」

と、信長は眞顔で答へたので、

「鬼——鬼とは？」

又左が、眉を上げたり、下げたりすると、

「人間の空想的産物だよ。人間が拵へあげた傑作の一つだよ、又左」

「どうも仰しやる事が、私には解りかねますが」

「當り前だ。これが解つたら變だよ、なあ猿面」

信長が、顧みると、猿は、目をばちくり、ばちくり。

「變でせうか？」

「なら、解るのか其方は？」

「來年のことを云ふと、鬼が笑ふと謂ひますからね。殿は、來年か、さ來年か、四來年、いやもつと

先のことまで、お考へ過ぎなすつたといふわけだ」

猿の解答は、明快だった。
「うふふ、妙に勘の宜い奴さー どうだ又左、すこしは猿に肖つたら？」

「眞ツ平です。すべて人間離れは、私の格では御座りません」

と、又左はお辭儀をした。

「うまく逃げたな。そんなら船だ」

「は」

「云つて見ろ」

「は。朝鮮、大明——唐天竺、印度西域、南蠻船で御座りませうかな」

「馬鹿野郎！ その位なら、女小兒でも知つてゐる。土臺、西域といふ所は、海の無い國だ。だから

西域船なんて船は、世界中を探したつてもありませんのだ、氣をつけろツ」

「恐れ入ります」

「恐れ入らなくてもいゝから、ちつと遠い方も眺める癖を、つけることだ」

「は！ 今後は心づけます」

「明船や、高麗船はいはずともだ。ルスン船、マカオ船、安南船、東京船、瓜哇船、カンボチャ船、

暹羅船、リゴル船、マラツカ船、タアジイ船——たゞ印度船といふだけでは、はつきりしないのだ、

つまりラングン船、マドラス船、セーロン船、ゴア船と、いろ／＼あるのだ。一口に南蠻船といふけ

れど、そんなことちや足りんのだ。不可ないのだ。葡萄牙船、西班牙船、羅馬船、イギリス船、和蘭

船といふふうに、分けて云ふのが本當なんだ」

信長は、いつ調べたか、どこで聞き覺えたか、外國船の種類を、驚くべき精密さで並べた。

ざつと港見物を済ますと、信長主従は、一たん宿に戻つて、それから出直して、住友屋壽齋の店を訪れた。

住友屋壽齋といへば、堺第一の大商人であつた。——この港街で十人の大納屋衆の一人で、貿易によつて蓄積された富は、じつに莫大なものだつた。

だから、その店構への廣大なことは、田舎者の度膽を挫いでしまふ。

さすがの猿も、口を開いて、

「愕かせアがるなア！」

と、眺め廻した。

(四)

長い間口に、店先に、すらり並んでゐた店員どもは、つかくと這入つて来て、物も云はずに框を上つた客の横柄さに、膽を揺すらがした。

どう見ても、

(片田舎の庄屋に、やつと毛の生えたぐらゐ！)

なのである。

汚い草履ばきの、足を埃だらけにした珍妙な、人間としては甚だ申分のある顔つきなのが、従者にちがひないが、主に負けん氣で横柄に、頭をこくりともせず、草履を脱いで、てらく光澤拭きのしてある樺の框目の框に、片足をかけたから、

「あゝこれ、ちよいとお待ち！」

と、一人の手代が、聲をかけて支へた。

「上つては悪いんですか？」

さうと、猿面藤吉が訊いた。

(おやおや？ 言葉は割に丁寧だな)

手代どもはさう思つた。

別な手代が、

「上つて悪いといふ譯では、御座いませんが一體、なに御用なんで？」
と、云ふと、すでに上つて了つた信長が、

「鐵砲を、買ひに来たのだ」

と、答へた。

「お買ひ物の御用なら、どうぞあちらでお腰掛け下さい。わざわざお上りを願つては、却つて不都合で御座いますよ」

「をかした店だな。店先に腰掛ける客だけに賣るのか？」

「いや、だけといふ譯でも御座んせぬが」

十人も並んでゐた番頭席から、一人出て来て、

「——ではまあ、お坐り下さいませ。鐵砲と申しましても、色々御座いますが——」

「立つてゐるものには、賣らんのか？」

「いゝえ決して決して、さういふ譯では御座いませんが」

「さつきから、いふ譯、いふ譯つて、まさか譯を商ふ店ではあるまいな」

「御冗談を！ 手前共では、雜貨、百貨の舶來品で御座いますよ、商ふ商品は、すべて外國から仕入れた、渡來ものばかりで御座います。只今では、鐵砲も、下等品ならば、この堺浦の鐵工場でも、製作がどうやら出来るやうに相成りましたが、左様な品は、取扱ひまする店が他に御座いまするでな、手前共の品は、お値段の方が、だいぶ桁ちがひに張るやうですけれど、その代りには、正真正銘、

まがひなしの舶來品で御座いまして、しかしその渡り物にも、並物、中物、上物、極上物と、四通りも區分が御座いますが、御用は、どの邊のところまでせうか？」

番頭は、實は、多寡を括つてゐたのである。

どうせ、東か北の方の田舎武士のことだから、堺出來の品でも結構似合ひさうだが、折角うちへ來たのだ、

(並物でも)

と、思つた。

鐵砲は、まだく貴重品だつた。初めて傳來してから五十餘年は経つてゐて、よほど普及してはゐたが、それでも最新式の葡萄牙もの、西班牙ものとなれば、滅多な武士では手が出ないほど高價なものであつた。

信長が、

「極上物は、何挺くらゐあらうかの？」
と、訊いた。

「え？ 極上物の、手前共の、手持の數ですか？」

「さうだよ」

「餘計なお世話ですね」

「なにが？」

「そんなことを聞いて、なんに成さうツてんです？」

番頭は、むツと怒り顔をした。

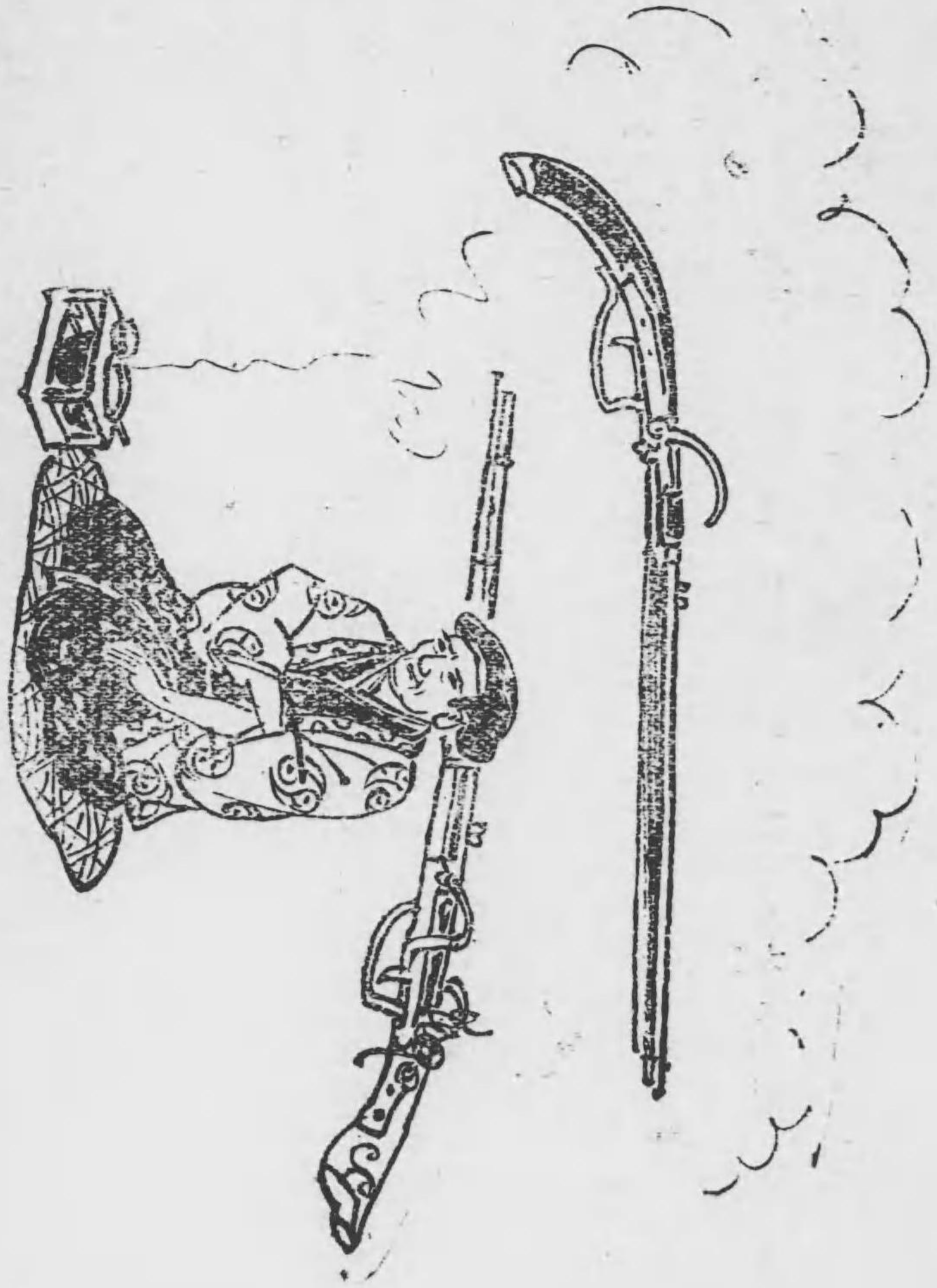
「買ふのだよ。買へたら、残らず買ふよ」

「冗、冗談おつしやつちや困ります？」

鐵砲といふものは、只の棒ちやありませんよ。南蠻鐵
機械ですよ。しかもですね、極上物となれば、萬里の海のむかふから、船に積んで渡つて参つたもの
ので御座いますよッ！

「千挺くらゐか？」

と、信長が訊いた。



「馬、馬、馬鹿なツ！」

と、番頭が嗚鳴るやうに云つた。

「ほ、二千挺くらゐあるのか？」

「氣違ひッ！」

と、おぼえず叫ぶ。

叫んだ番頭だけでなしに、控へてゐた他の番頭どもも、手代連も、一度に呆れた眼を、信長へ集中するのだつた。

「仕様がないな。猿——。出て行つて、又左に、件の箱詰めを、運び込めと申せ」

「は！」

「先に見せて置かんことには、どうにも話が通じさうも無いよ」

「見かけ倒しの店だなあ！」

猿が、呟きながら戶外へ去つて、少時すると、又左の采領で、重さうな大きな箱が、いくつも幾つもの、店頭へ運び込まれた。

「な、な、なんです其れは？」

「なんですかよう、その箱は？」

「き、きたないなア、な、なんの箱だらう？」

店員たちは、叫んだり、喚いたり。

「そ、そ、そんな薄穢いものを、擔ぎ込んで、一體全體、ど、ど、どうするんですツ？」

その時、猿が、大音聲に、

「金だア！ 鐵砲の代金の前渡したア！」

と、叫んだ。

店の者どもは、
(飛んでも無いことになつたぞ、揃ひも揃つた氣違ひだ。何處から怎うして舞込んだか知れないけれど、桑原々々！)

手に終へないとなれば、奥の住居からお抱への、浪人衆を呼ばずばなるまいと、さう考へたのであるが、

「嘘と思ふなら」

と、猿が、再び、

「箱の蓋を除つて見ろツ！」

と、叫んだ。

蓋が、とられた。信長の家来たちは、箱の中味を、片ツ端から、さらげ出す。
燦として輝く、金の板金！

まがふ方なき黄金の判金だ！

小袋詰めは、砂金の袋だ！

たちまち永樂錢が、堆高く、店先の牀に積まれる。

「呀つ！」

「呀つ！」

商人の店の者だから、金錢に對する驚異はまた一入！

「ど、ど、どなた様でおはしますか？」

番頭どもは、平蜘蛛を押し並らべた形に平身低頭した。

信長が、奥の住居の客間に招じ入れられて、住友屋の主、壽齋と對き合つたのは、小半刻ほど後であつた。

(六)

信長は、壽齋と並んで坐つてゐる蘇我屋理右衛門の顔を眺めて、いきなり、

「堺の町屋の數と、住んでゐる人の口數は、どれくらゐるかの？」

と、質ねた、

蘇我屋は、目をバチバチした。

理右衛門も矢張、この堺港の大納屋衆の一人で、きこえた豪商だつた。どうして、こゝ住友屋の

客間に同席したかといふと、それは信長の鐵砲の注文が、途方もなく大きすぎて、とても住友屋一手

では、受けきれないからであつた。

——極上物一千挺、すなはちポルトガルやイスパニアの本國製の、いはゆるヨーロッパ物ばかりで

一千挺——ほかに、上、中、並をこみで二千挺、といふ大量注文なのだ。こみの方は兎にかく、ヨ

ロッパ製の極上ものを千挺には、大手隨一の住友屋でさへが、膽をつぶした。で、早速、蘇我屋を

招いて相談の結果、堺ちうの在庫品のすべてを集めて、この未曾有な大口注文に應じようといふこと

にした。並物でさへ、五百、七百と纏まつた需要は、ごく稀にしか無かつたし、いはんやヨーロッパ

物では、三十挺——せいゝ五十挺が、止まりで、どこの大名からも、それ以上の大口注文は來な

つたのに、信長は、さんと桁を飛び超えた一千挺だ。だから驚く。

だが、信長はもう、取引の濟んだ鐵砲よりも、他のことに氣を向けてゐた。

「どれほどのか?」

と、質問を繰返すと、

「はい。——本年度はまだ調べが附いてをりませぬが、去年の調上げによりますと、えーと……」
蘇我屋理右衛門は、想ひ出さうとする顔で、住友屋の方を見遣る。
信長が、

「毎年、調べるのか?」

と、訊いた。

「左様で」

と、住友屋が答へた。

「ほう、行き届いたものだな。學ぶべきことだ」

「恐れ入ります」

蘇我屋が、

「人の口数は、たしか十四萬四千四百なんぼか御座いました」

と、いふと、信長は、

「ざつと十五萬か。大層な人口だな!」

ばかに感心したらしく、

「それで、家数は?」

「棟數で申しますと、二萬五百九十何棟か御座いますけれども、納屋だの物置だので數が高みますので、世帯の數で申せば、ちやうど一萬そこそこので御座います」

さう蘇我屋が答へた。

「素敵な樂津だのう!」

物に驚かない信長が、不思議と感心したのである。

だが、これは、決して不思議などといふべきでは無かつたらう。信長は、堺といふ樂津の大きな富の程度——つまり經濟力を、まざまざと頭に印象させたのであつた。

樂津といふのは、免税地である港のことだ。

——堺は、樂津であつた。

この海港都市は、誰からも支配を受けなかつた。堺は、何人の堺でもなくて、たゞ堺人の堺だつたのである。

ちやうど中世ドイツの、ハンブルグ港が單一な都市でありながらハンザ同盟國の一つとして榮えたやうに、わが堺もまた、一樂津として、諸大名の國々、および大寺院の各勢力に對して、獨立の一敵

國を成してゐたのだつた。

(七)

士農工商などと云つて、商人を四民の一番どん尻に据ゑたのであるが、その賤しめられた商人が、當時は經濟的にも、文化的にも、優越してゐた。

堺の商人は、その代表的なものだ。
信長が、

(えらいものだ！)

と、感心したのは道理だつた。

その頃に、人口十五萬を持つ都會を成立させるといふことは、全くどえらい力だ。

十五萬の人口は、昭和の現代における堺市の人口よりも多い。昭和十年の國勢調査によると、堺市の人口は、十四萬一千二百八十六人で、その世帯数は、二萬九千五百十八だ。

ところが、蘇我屋理右衛門に云はせると、世帯の数は一萬内外だから、今日の堺市の世帯数とくらべると、三分の一だ。しかし、世帯数の少いといふことは、住民の大所帯を意味する。貧乏では到底

大きな世帯は張れない。一萬の世帯で、人の口数が十五萬あれば、一世帯の平均は、十五人だ。

これは、住友屋とか、蘇我屋とかいふ豪商が、多勢の使用人をつかつてゐたのみならず、用心棒の浪人群を養つてゐたからで、さうした大商人が、一軒で、何百千といふ人間を使つてゐなければ、一つの世帯で十五人平均といふ數字は出て來ない。

樂津、堺は十人の大納屋衆と、二十六人の納屋衆によつて支配された一箇獨立の商人國だつた。市街の周圍には、防備のため繞らされた濠が、大和川からの水を湛へてゐたし、その内側には壘壁が築かれてゐた。市街全體が、一つの城の内部にあつたのだ。

だから、諸國の大名や、大きな寺院の有する武力に對抗して、充分に戦ふことが出來た。堺の商權は、自分の武力で擁護されて來たのだ。

九州には、博多があつた。平戸や長崎があつた。そして、商人の町ではなく、大諸侯の城市として豊後、大友氏の府内があり、周防大内氏の山口があつて、いづれも外國貿易で榮えた。

してみれば、堺のみが貿易の利を獨占した譯ではないけれど、なにしろ堺は、地の利に最も恵まれてゐた。位置が、近畿といふ中原に在つたし、室の津が衰へたことも、一層、堺を有利にした。

外國からの輸入品は、いろ／＼あつたが、鐵砲一つだけを例にとつて見ても、堺商人の普及力はすばらしかつた。

鐵砲の傳來を、天文十一年に、種ヶ島から傳はつたのが最初だと考へるのは、間違ひだ。永正の七年といふと、天文十一年よりも三十二年前だが、この年に、小田原の山伏、玉龍坊が、堺港で鐵砲を買込んで、これを北條氏綱に献じてゐる。

すると、いま信長が、住友屋の客間に坐つてゐる時から溯上れば、五十二年だ。

永正の初めから、五六十年も堺商人は、鐵砲を擴めたわけだ。

この利益だけでも、相當なものだ。

富が、堺に集まつたのは當然だつた。

(この港と、商人を、利用しなければ嘘だ)

と、信長は思つた。

(一萬世帯の商人町に、年貢を出させたら、それだけでも京都の衰微が救へるかも知れんぞ……)

さうも思はれた。

(この住友屋なんぞ、嘸かし、金銀、錢を、山ほど積んでゐることだらう)

そんなふうにも考へて、

「贅澤な普請だのう！」

客間の造作を、きよろしく見廻したのであつた。

(八)

人口の多いのに感心したらしい信長が、一轉して今度は、座敷の建築をほめて、

「お蔭で、七十五日は生きのびたやうだ」

と、云つた。

但し、これも唐突であつから、

「なんと仰しやいます？」

住友屋壽齊は、聞き直さうとした。

「初物を食へば、七十五日といふ。何も食ふだけには限るまい。こんな金目を食ふた造作は、わしの目には初物だよ」

と、信長が、ほゝゑんだので、

「お戯れを！」

「S、V、や、に七十五日だ」

さつき自分が渡した金銭を見ておどろいたやうな顔をしたのは、あれは金を儲けて金を殖やすのが

目的の商人だから、そんな顔になつただけのことで、あれツぼツちの金銭——餘り米を、他所へ賣つて毎年すこしづつ貯めた、わづかな金ぐらゐるは、この住友屋の富からすれば、實は可笑しいやうなものに違ひないのだ。

さう、信長には思はれた。

仰向いて、天井を眺めて、

「あの木材は、なんといふ木かの？」

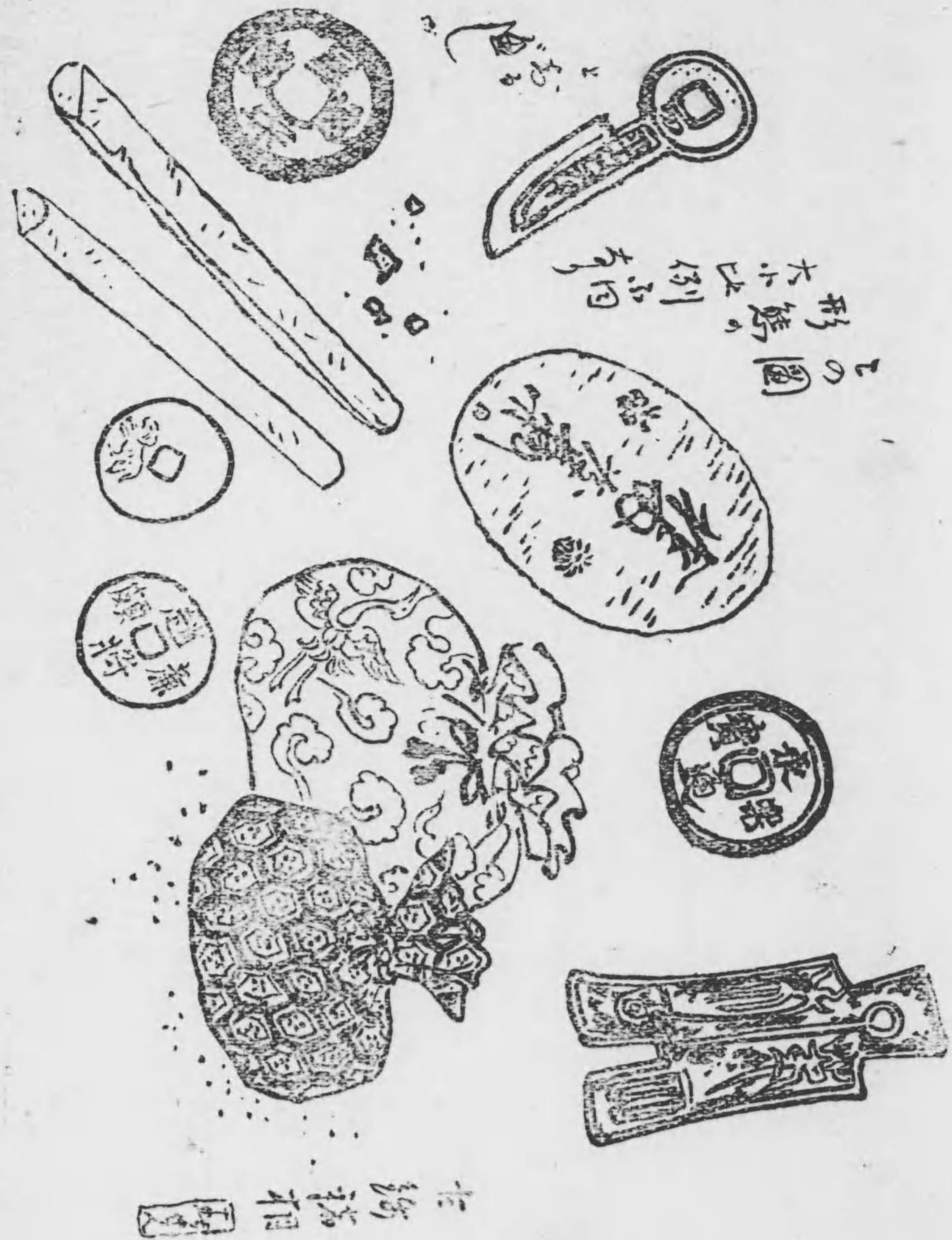
「白檀で御座います」

「唐木か。見事な柱目だな。——何とか天井と、名が附いてるのだらう？」

「どう仕りまして、たゞの小組天井で御座います」

と、壽齊が答へた。

この住友屋壽齊は、支那へ渡つて、銅から金銀を吹き分ける法を習得して来て、日本の鑛業に、一つの新時期を劃した技術家でもあつた。累代の豪商だつたのみでなく、また慧敏な新人でもあつたわけだ。近代ブルジョワの先驅をなした彼の子孫は、連綿として榮えて、つひに明治以後は、新興帝國の財界に、謂はゆる住友王國として蟠居するに至つたのであるが、そんなことは此場合、もちろん蛇足にすぎない。で、壽齊は、さう答へてから、じつに意外な質問をする東海道の英雄を、またも改



めて眺め直すのだつた。

(これが、今川屋形を一戦に討取つた人であらうとは！)

だが、信長は頓着なしに、

「あの、床柱は、何といふ木かね？」

と、聞いた。

「あれで御座いますか。鐵刀木と申します」

「タガヤサン？ 唐變木だな」

「唐變木、はッはッ」

おぼえず笑ひが出た。

壽齊は、即座に信長が、唐變木と云つたことに、ユーモアを感じたのである。

「いや唐木では御座いません」

「そんなら蠻木といふわけか」

「左様で御座います。東印度諸島が、原産地で御座いまして——」

「ほう。すると、ジャワ木、マラツカ木——どう云つて見ても變な木だよ」

「はッはッ、御意で、さう仰しやれば、どうも變に聞えまするな、ジャワ木など……」

壽齊ほどの人間が、つひ釣り込まれてしまふのであつた。

「しかし、タガヤサンは、いゝ學問をしたよ。するぶん値段も高いのだらう？」

「どう致しまして、知れたもので御座います」

「お許には知れたものでも、俺などには、手が出さうもないで、わはッはッ」

信長は、住友屋も、蘇我屋も、訝やツと思ふくらゐ、大きな聲で笑つた。

(九)

又左衛門利家は、築地の門から出て信長の姿を見ると、片手を高く揚げた。

波止場の登から、築地までの距離は、かなりあつたが、信長は又左を認めたらしく、そこまで歩いてきた住友屋と蘇我屋の主人に、なにか云つてゐるのが見えた。

築地と登の間は、砂濱だつた。砂濱には何條か通路が出来てゐて、車が、樂に通れた。砂地は、ピカ／＼陽に照り返つてゐた。

壽齊と、理右衛門が、丁寧にお辭儀をした。信長は、猿を連れて道路の一條を、波止場へ近づいて来る。

いま、波止場では、大型の回送船に積荷の最中だつた。

岸壁の登には、船が横づけになつてゐる。船縁へ板を渡して、荷物を、人夫が擔ぎ込む。

さすがは、日本一の貿易港。その大手商人の仕事だけあつて、迅速でもあり、きちんと統制が行き届いてゐた。迅速の證據には、つひ先刻、信長の買った鐵砲が、ちあんと荷造りされて、たぶん五挺一包みの箱入りであらうが、其等多數の箱詰が、もう片端から、どしどし船に積み入れられてゐるのだ。しかも、格別に喧鳴り散らす率領がゐるでもなく、靜肅に、だが、極めて能率的に作業が進行してゐるのは、訓練の程が想像された。

又左以下、家來たちにとつては、その作業は、珍しい觀物だつた。

「手廻しのいゝもんだな」

と、信長は十間も先から、又左へ、話かけながら近寄つたのである。又左が、

「商人といふものは、敏ツこいもので御座いますな」

と、答へた。

「この船は、六日目には熱田へ着くとよ」

「さう致しますと、今月うちには清洲のお城の武器庫が、おツそろしく充實するわけで……」

「さうだよ。清洲の奴等は、きつと膽を潰すぞ」

「殿、池田は、べそを掻いてをります」

「べそを？ 鐵砲と一緒に國へ歸るのが、そんなに厭なのか」

信長が、さう云ふと、

「勝三郎ツ！」

と、又左が呼んだ。

猿が、

「お金の値打の解んない男なのです」

と、批評した。

「黙つてゐろ」

信長は、猿を叱つて、船の方から走つて來た池田勝三郎信輝へ、

「勝三。三千挺の鐵砲を、おろそかに思ふのか？」

と、云つた。

「——殿！」

「どうなんだ」

「莫大な金銀でお買入れに相成つた鐵砲を、なんで疎略に存じませう」

「だが、番人をして歸るのは、厭と申すか？」

「は。……然しながら」

「何だ？」

「強つてと仰せあらば……」

「するい奴だな。實は誰でも宜いのだ。其方が厭なら、他の者を歸す」

「おゝ、有難き仕合せ！」

と、勝三郎が頭を下げた。

猿が、

「はい。わたしも厭で御座いますよ」

と、お辭儀をした。

「そちなんぞに勤まるものか、オタンチン」

信長は、船尾に「和泉丸―第一號」と見える大船の、船側へ歩いて行つた。

大坂の起源

(一)

信長主従は街道を、北へ、住吉の方へ進んでゐた。

鐵砲と一緒に、住友屋の廻送船、和泉丸に乗り込んだ十一名だけ、人が減つてゐたので、一行は、二十人ほど――例によつて猿が、迅風の轡とり。

「あれで矢ツぱり、塚は、町一つでも、怖るべきものなんでせうか」

「あれで？」

「はい」

「金の力はな」

信長は、迅風の鞍の上で、左右の景色を、眺めながら、

「すこし大袈裟にいへば、日本の國々の金が、おほかた塚に吸ひ取られる。金銭なんぞと厭に蔑視ん

だのは昔のことで、これから先は銭が無くては、二ちんも三ちんも動きが取れまいよ。金銀錢大明神様々になる」

「さうなれば締めたもんで」

「なんで？」

「劍を磨く又左よりか、判金や小判を磨く猿の方に、軍配が揚りますからね」

「はッはッ、此奴、さも金持ちみたいな音を出す」

信長が、笑ふと、馬の尻のところを歩いてゐた又左衛門利家が、

「殿。——猿めの持つてゐる虎の子は、判金が一枚と、小判が十枚きりで御座いますよ」

と、事實を申告した。

「あゝさう正直に、ぶちまけちあ駄目ですよッ」

猿が、後を振り返ると、信長は、

「ほう板金なんか持つてゐるのか。猿。どこから盗んで来た？」

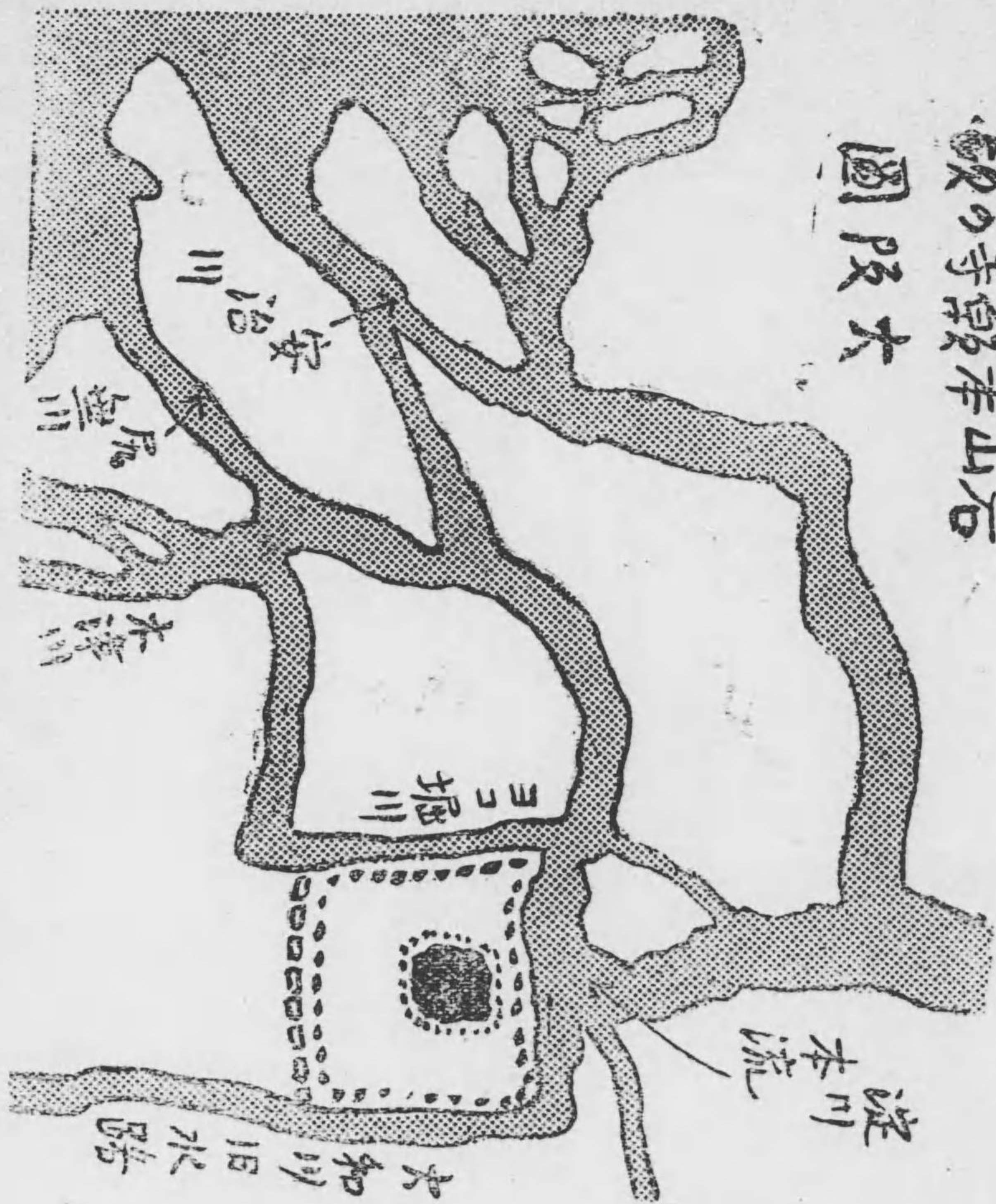
と、云つた。

「人間のわるいことを、仰しやるものだ」

「そんなら溜めたのか」

石山寺殿の図

大坂圖



中央黒点 石山御堂 三ノ堀 大和川旧水路

「働きですよ」

右は遠里小野。

左は住吉の松原。

昭和のわれ／＼が、堺市から大坂へ這入るには、大和川を越さなければならぬ。川を越せば、住吉區だ。

しかし當時は、矢田部から真直ぐに西へ流れて、木津川の水路は全然無かつた。これは、後に人工で開鑿されたもので、もとの大和川は、矢田部から、ちやうど直角に折り曲つて、真ッ北へ流れた。そして、今日の平野川の川筋と略同じところを流れて行つて、生野、鶴橋、中本を過ぎ、鯉江で、河内の四條畷、住道の方から流れてくる寝屋川の水と一緒になつて、ちやうど石山御堂——後年の大坂城の北で、淀の大河に合流してゐたのだつた。

「堺は、金の力だけだけれど、大坂となると、金力武力の兩刀使ひだ」と、信長が云つた。

「大坂ツて、どこですか？」

猿が、訊くと、

「大坂を知らんのか、馬鹿野郎ツ」

「はてな。一向聞いた覚えの無い名だな」

「はッはッ、一向寮だよ。一向念佛の眞宗だよ」と、信長が笑つた。

「あゝ本願寺ですか。石山のことですね」猿は、自分でも笑つて、

「あすこなら、おまけに阿彌陀様の後光を背負つてまさあー！」さう云ふと、信長が、

「生玉の莊、大坂といふ場所なのだ」と、教へた。

(二)

猿が、圓ら眼で、

「大坂といふ場所を、石山といふのですか？」と、訊ねた。

「石山と、なぜ云ふか——云つて聞かさうか」

信長は、馬上で微笑すると、

「それ式のこと——云つて聞かせられなくても知つてゐますよ、存じてゐますとも、はい」

猿面は、振返つた顔を、普通の姿勢へ戻してから、嚮先で、つツと反り返つて見せた。信長が、

「ほう豪氣、威張るの」

と、云つた。

「敢て威張りはしませんが——石があるから石山でせう」

猿らしい氣轉を利かせた。

「頓痴氣め！」

「はて、違つたかしら？ そんならと……え、と何ですよ、石山寺紫式部です」

「はツは格にも無い！」

「紫式部は、筆も立つたが、顔も宜かつた」

「石山寺がどうだと云ふのだ？」

「石山寺は、近江です。琵琶湖の岸です」

「野郎、ごまかすな」

「ごまかすもんですか」

圓ら眼が、また振向く。

信長は、面白がつて、

「琵琶湖の畔が怎うした？」

と、追及すると、

「鈍いですね」

「鈍い？ 俺がか？」

「貴方とは申しませんが、琵琶湖の岸だから、水に近い。江に近い。すなはち近江です。つまりです

ね——」

「何が、つまりだ？」

と、なほも追ひ詰めた時、藤吉の天才的な頓智が、俄然ひらめいた。

「近江の石山寺からですね、ひろびろとした湖を眺める景色が、問題のですな、大坂から、漫々と湖のやうに流れる淀の大江を、眺める景色に、さながら、そっくりなんです。あ、石山寺に似てる——」

「此奴、考へたな——」

「そこで、石山寺に因みましてな、こゝ生玉の莊、大坂も、やつぱり其名を石山と名づけて、大坂本願寺が即ち石山御堂、一向宗は南無あみだぶつ、なんまいだ、念佛専修お有難やの門徒衆の、善男善女がですね、この世ながらの極樂淨土と、拜みます。隨喜の涙をぼろぼろこぼします」

「わはッは、もうい、もうい、」

と、信長が笑つた。

又左が、呆れた聲で、

「猿よ！ よくもまあ出鱈目が、さうつらつらと出たもんだー」

と、云つた。猿が、

「全く訝しなものですよ」

と、答へた。すると、信長は、鸚鵡返しみたいに、

「全く訝しなものだよ。——野郎が放題に遣つつけたことが、一々當つてゐるから妙だ」

さう、云つたものである。

猿は、他人事のやうに、

「不思議ですなえ！」

と、振り返る。

「不思議だよ。石山御堂といふ名の來歴は、その通りなんだ」
信長が、さも心地よげに笑ふと、
「その通りとは、今、猿の奴がいゝ加減に——並べた通りなんで御座りますか？」
と、又左が訊いた。

(三)

「さうだよ、暗合といふ奴だ」
と、信長は答へて、

「大坂が、近江の石山寺の景色に似てゐるといふ當すツばうが、まぐれ當りに命中したただけでは無いから、不思議だよ」

さう云つたので、又左が、

「へえエ何かほかに、まぐれ當りをしたと仰有りますか？」

訊く横合から——といつても馬の鼻づらから後よりむいてではあるが、

「まぐれなものですかよ、百發百中、あへて鐵砲に限らずですね、諸事萬端、ねらつて外れた例しの

ないツていふ、射撃の名人ですもの」

と、猿が云つた。

又左は笑つて、

「名人は無からう」

「名人以上！ 名猿です。むかしから名猿は名演に通じると、さう申しますねえ、殿さまー」

「あはッは、そんな事を云ふものか。だけど、石が有るから石山は金的以上——大當りちや。よく當てたよ」

「それを御覽なさい」

猿面の鼻の穴が、一だん上向きに押ツびらく。首だけが振りむいてゐるのではなくて、體ぐるみに後ろ向きになつて、響に引摺られる形で、猿は背進してゐる。まさしく陸上のバツク・ストロークだ。

又左が、

「あれだ！ 殿つ、附け上りますよ」

と、云へば、

「なアに、お馬の口に、釣り下つてます」

「つける薬の無いといふ野郎だよ又左」

信長は、さう云つてから、

「しかし石山の石には、おれも些かでなく驚いたな」

又左が、

「殿、御冗談では無く？」

「ほんたうだよ。大昔、聖徳太子が大伽藍をお造りになつた時の、礎石が、土に埋もれて残つてゐたのだ。石山の名は、そのためにも名づけられた。蓮如上人といふ坊主は、大坂といふ土地に目をつけ、そこに石山御堂を建てた事一つでも、どえらい人物だ。日本の歴史上、大昔からかぞへてきて、幾人とも無いほどの傑物だと、おれは思ふ。坊主の中の大物だといふ意味ではないよ。僧俗ひツくるめて、あらゆる階級を通じて、日本の人物として傑出してゐると、さう俺は云ひたいのだ」

信長は、いつに無く人を讚めた。

こんな無條件な賞讃辭は、又左も猿も、つひぞ聞かされたことが、なかつた。

「へえエ、蓮如上人といふ人はそんなに豪い方で御座りましたか」

さう云つたのは、又左であつた。

「豪いとも」

信長は、微塵も巫山戯氣味を交へずに、

「平清盛と比べて見ろ」

「清盛と——比べるので御座りますか？」

と、又左が、膝に落ちないらしく訊いた。

「清盛には、大坂が見つからなかつた」

と、信長が答へた。

それでも猶、又左には解せなかつた。

「と——仰有いまするのは？」

「馬鹿野郎ッ」

叱りつけて、

「石山御堂の屋根の——見える場所へ行つてから、聞かさう」

(四)

左へ行けば、粉濱、玉出、今宮、難波。それから大川を渡るなら、先は北野路だ。だが右へ行けば
吾孫子、帝塚山、阿倍野、天王寺、玉造の村々が、ぼつくと、丘の斜面に、坂の中段に、または淺

い谷間や、末ひろがりの狭間の原に、常緑木の森を背負つたり、雑木林の裸枝に囲まれたりして、見
えつ、陰れつしてゐる。

その右手の道を、信長一行は進んで行つたのであるが、ちやうど天王寺の丘陵の、北の角まで来た
時、信長は、馬から下りた。

「こゝが宜い。さあ眺めろ」

攝津河内の慶野が、難波と、うらゝかな早春の陽光のなかに、ひろがつて、平野の果は空に接し、
その霞む空の中から流れ出して来るかのやうに見える白銀色の淀の大川が、大きく一うねりすると、
川の流れば二つに分れて、本流と中津川になる。中津川は、現今の新淀川で、ほとんど一直線に海に
注ぐ。しかし淀の本流は、中之島を抱いて、また一うねりすると、流れはまたも、安治川と木津川の
兩流にわかれて、洋々たる浪速瀉、茅渚の海に入る。

「どうだ、蓮如上人の偉さが解つたらう」

と、信長が云つた。

又左は大和川が寝屋川と一緒に、淀の大川に合流する場所に、高く聳え立つ、本願寺の莖を、眺め
ながら、

「ほんたうに、素晴らしいお寺で御座りまするなあー」

感じ入った聲を出すと、池田勝三郎が、

「あれ／＼光る光る。金を張った屋根で御座りませうか？」

と、云つた。すると、迅風の鼻面を撫でゝゐる猿が、

「金を喰つただけでは足りないで、頭の天邊まで金を張つて見せるといふ。お有際の寺なんだよ。拜め、拜め！」

と、叫んだ。

「やい矢喧しいぞ猿つ」

信長は、睨みつけて、

「おれは、御堂の屋根のことを云つてゐるのではない。ぐるりと見渡すのだ。たしかに日本一だ。天下無双の形勝地だ」

「殿さま！ぐるりのこんな景色がですか？だゞッ廣いだけの、こんな殺風景な景色がですか？」

猿は、ぐる／＼と眼を回轉させて、

「だゞ大風呂敷をおツびろげて、白い紐でも乗ツけたみたいな……」

さう、一向頂戴出来なさうな顔をする時、

「おたんちん奴、その大風呂敷に白紐が、物をいふのだ」

信長は、叱るやうに云つて、

「この形勝第一の大坂を、見つけた蓮如に比べると、鼻の先の間へるやうに狭い福原へ都を遷した清盛は、ひどく人物が劣る。もし清盛が、福原へ移るかはりに、この大坂へ移つたとしたら、平家はおそらく、あゝは惨めに滅びはしなかつたらう、と俺は思ふのだ。全く蓮如は、眼が高かつたよ。いまは曾孫の顯如の代だが、この顯如上人が、また傑物なのだ」

平清盛が、海に目をつけたのは宜つたけれど、福原すなはち、今日の神戸に都を遷したのが誤りだつたと、さう信長は考へたのであつた。

「殿さま！」

「なんだ」

「大風呂敷に白紐だと、どう物を云ひますかな？」
と、猿が尋ねた。

(五)

「覇を稱へると云ふのだ」

と、信長は答へた。猿が、

「紐と風呂敷がですか」

さう、訊きなほすと、

「おれは、久しいあひだ濃尾平野をすこし、買ひ冠りすぎてゐたのだ」

「殿さま。お國の野ツばらの話ぢあないですよ」

と、猿が、いはゆる半疊を入れるやうに云ふと、

「阿呆つ。先走り過ぎるのも馬鹿の部だぞよ」

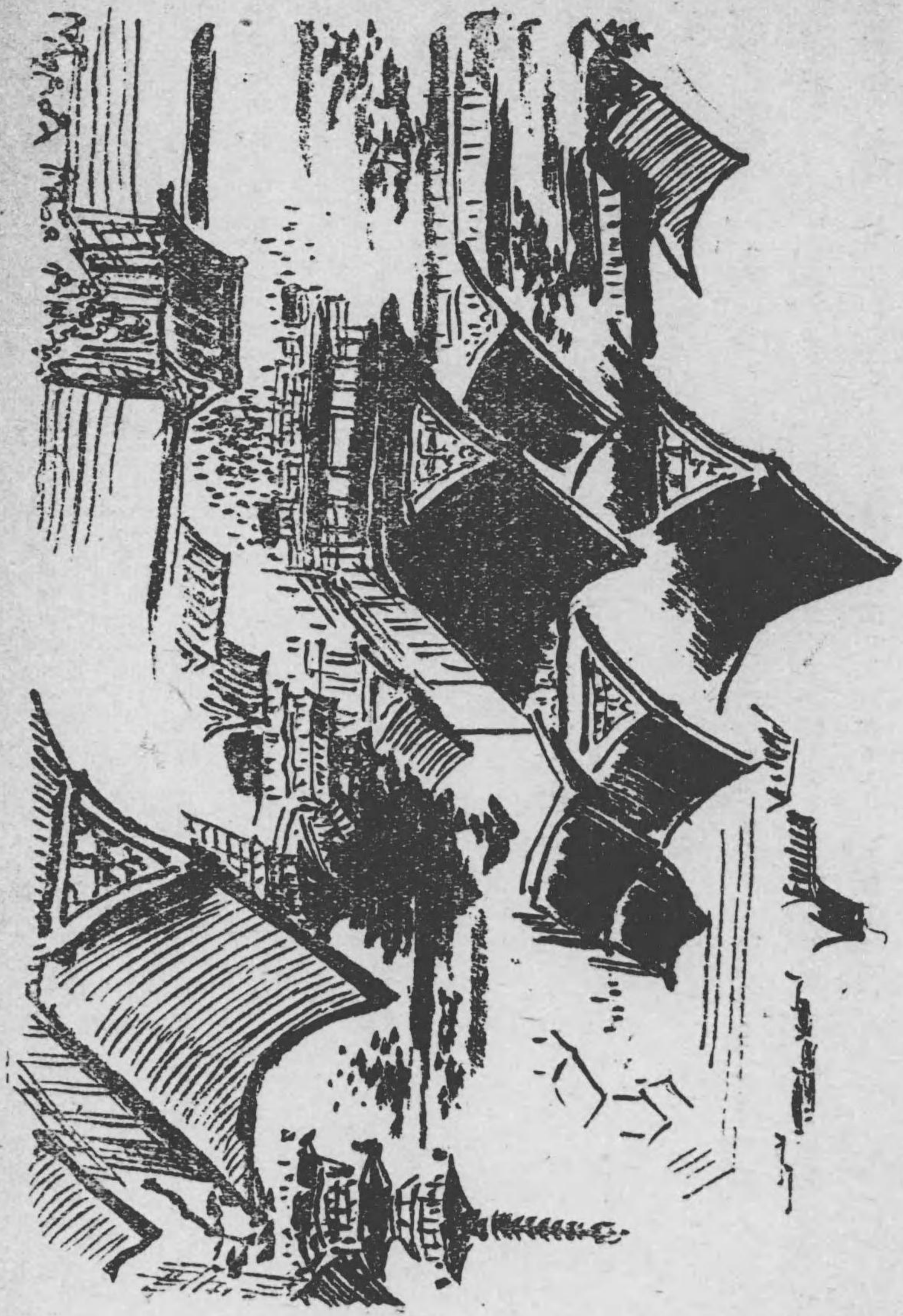
「違ひない。馬鹿早いと云ひますからね」

「おれは、こなひだ、奈良から堺港へ来る途中、金剛山脈の峠ごえをした時、攝・河・泉の大平野をながめた時、自分の認識が足りなかつたことを、痛感したのだ」

「殿さまが、ツウ感なすつたんですか」

「黙つて聴け。おれは、大坂を中心とする攝・河・泉、平野について充分な豫備知識を持つてゐた積りだつた。ところが大和の龍田から河内の道明寺へ、峠を越してみても實は吃驚した。それから堺港の繁昌ぶりを、眼のあたりに見た時が、二度びツくりだ」

「殿さま。堺港の方だつて宜い加減、信長といふ殿には、吃驚しましたよ」



と、また猿が、半疊を入れた。

「話の腰を折る奴だな。おれは今げんに此處で、三度目に吃驚してゐるのだ。見ろ！あの壯大な原野と、大川と、川の洲を、見ろといふのだ。どんな大きな城でも、どんな大きな街でも、造らうと思へば怎んなにも造れる」

信長は、さう云つて、指さして、

「實に、壯んな、強大な姿ではないか。この大自然、この大平野の地を利用してこそ、初めて天下に覇を稱することも出来ようといふものだ！」

言葉には、熱が籠つて、いひ知れぬ烈しさが感じられた。

もはや猿も、音が出なかつた。又左や勝三郎は、いふまでも無かつた。

「おれは」

と、信長は續けて、

「尾張と美濃の、木曾川平野を、がっちり握れば、天下を定めることが出来ると思つたのだが、それは間違ひだ。天下を争ふことは出来ようが、日本中に號令する全國制覇は、堺港をも含む大坂の地の利を、占據しないことには、とても不可能だ。——どうだ、又左は解つたか？」

「は！」

「勝三はッ」

「は！」

「猿は、どう？」

「ほんたうにペチャンコです。ほんたうに殿様はお偉いですよ。お偉いのは無ろん解つてゐましたけれど、今といふ只今、それを、ツウ感したのです。はい」

「痛感だ？ 野郎、おれの口眞似をしたな」

「ほんたうに、ツウ感したからです、はい」

「こいつ、また云ふのか？」

「伺ひますが、大坂のですね、つまり石山のですな、地の利を、あんなふうになガツチリ占めた本願寺のお法主さまは、そんなら遠からず、天下様におなりなんでせうか？」

と、猿が訊いた。呶鳴られるのは覺悟の前で、さう訊いてみたのであるが、案外にも信長は、すこぶる附きの上機嫌で、

「うむ、よく訊いた！」

信長は、うなづいたのである。

よく訊いたと賞めたほどだから、もちろん良く解るやうに云つて聞かすのだらうと、猿は待ち構へたし、又左と勝三郎は耳を、そばでたのに、思ひのほか——なんの事だ、信長は、いきなり愛馬迅風の背へ、とび乗つて、たく、たくと歩ませ始めたではないか。

「アレレ殿つ！ 殿さまツ！」

待ち構へた當人だから猿は、誰よりも餘計にびつくりしたが、また誰よりも先に追ツついて、馬の響に取りすがつた。しかし、信長は迅風の歩みを停めなかつたので猿は、引き摺られて行つたし、又左その他も、むろん見てはゐられない。供だから、跟いて行かなければならないのだ。

「殿さま、石山御堂の天下取りのお話は、た、たち消えなんですかツ？」

猿が、叫んだ。信長は笑つて、

「石山の話は、詳しく堺の津で聞いては来たけれど、百聞も一見にしかすと云ふからな、これから行つて大坂の、總構への中を、一應覗いたその上で、言つて聞かすから、待つてゐる」

「天下取りのお話ですよ、よう御座んすか」

「厭に念を押すな。なぜさう熱心に聞きたがるんだ？」

「この猿、不肖ながら天下に、いさゝか志が御座いますによつてな」

「唇を縫ひつけてしまふぞ」

十町ほど進むと、そこはもう大坂の空濠だつた。

幅廣い橋を渡れば、總構への内部だ。そこには賑やかな門前街が、縦横に、幾通りも榮えてゐた。

ほとんどあらゆる商品が、商はれてゐた。門前街は、町家の戸数が六千軒を超えてゐるのだつた。

その頃——すなはち永祿年間に六千軒の商店を持つ町は、だんぜん大都會だ。

衰へたと云つても京都は首府だから、これを別にすれば、日本中で、堺が第一、大坂が第二番目の

都市だつたらう。

總構への廣さは、およそ一里四方。——南の一方だけは空濠であつたが、東は、大和川、西は横堀川、そして北は淀の大川が、流れ繞つて、天然の要害、自然の大濠をなしてゐた。そして、これを外濠として、さらに内濠があつた。内濠の内部、八町四方で、その中央に、石山御堂の大伽藍が建つてゐた。その同じ場所に、後には豊臣氏築くところの大坂城天主閣が聳えることになるのであるが、この時は、浄土真宗の大本山だつた。

「どうやら」

と、信長が云つた。

内濠の端に、馬を停めてゐた。

壘壁が、高いため、濠端まで来ると、さつきは見えてゐた御堂の屋根さへが、石垣の彼方に隠れてしまつた。猿が、

「まるで城ですな」

と、信長の顔を仰いだ。

「城だよ。石山城だよ」

「でも、名は、御堂なんでせう？」

「違ふ。御堂は、なかにある。この城のなかには、御堂のぐるりに何萬人といふ兵士が、住んでゐるのだ。坊主が、おびたゞしい数の士を、養つておくのだ。戦争をする時の用意だ」

「城のなかへは、這入れんでせうね？」

「這入れんことは無いが、佛なんか拜んでも俺たちに、御利益があるかよ。この石濠と、濠の具合とそれから町屋の繁昌ぶりをだ、もう見てしまへば、それで結構だ」

信長は、猿へ、さう云つて笑つたのであつた。

入京第一日

(一)

信長一行は、石山御堂の門前町であり且また城下町でもある大坂に、宿をとつて、三泊ほどして、それから牧方、男山を経て京都へ行つた。淀川ぞひに上つたのである。

「おツそろしく朝寝坊の町ですね！」

さう云つたのは、れいの猿であつた。

「阿呆め、京の町が寝坊なんぢやあない。まだ夜が明けないのだ」
と、信長が、愛馬の鞍の上で微笑した。

「なアるほどな。さうかも知れん」

猿が、呟くと、

「おれたちが早過ぎたのだ」

と、信長がいつた。

京の町々は、曉の眠りから覺めてゐなかつた。

信長主従は、夜どほしで歩いて來たのだ。伏見の向島から豊後橋を渡つて、上鳥羽を通つて入浴した時は、まだ四邊が眞暗だつた。そして今、市街を縦に通りぬけた。内裏御所の前に近づいたのであつた。

黎明の中空には、まだ星が、またゝいてゐる。

「一日のうち、一番清淨な時刻だ」

さういふが早いのか、ヒラリと馬から下りた信長は、

「靜肅にしろツ！」

と、云つて、自分は、スルスルと前進した。家來どもが、訝やツと思ふうちに、御門の閉ぢられた扉から、二十尺ほどの距離で、びたりと地べたに跪坐した信長だつた。

長くも一天萬乗の大君のおはします宮居の、おん前に、いとも恭々しく額づいたのである。

(おゝ！)

又左衛門も勝三郎も、猿をも含めた其他の家來どもも、みな一齊に瞳を据ゑて、呼吸をこらした。もちろん言葉などは、半言隻句も出ない瞬間が、連続した。

(あゝなんと、敬虔そのもの、殿のお姿よ！)

意外とも、案外とも、形容出来ない一種の放心状態に、家來どもは置かれたのである。

そして、少時。——やつと氣づいたことは、

(自分も！) (自分も！)

べたべたと、二十人が一度に土下座して、額を大地に、こすり着けるばかりに下げたのであつた。家來たちは、最敬禮を濟ましたが、信長だけは、なほ額づいてゐた。

(殿つ！)

と、猿は、後ろから呼ばうとして、危く出かゝつた聲を、ハツと殺して、息を一呑みしてから、自分の舌を、懲しめるといふ意識でギユウと噛みつけた。

(他の場所とは、場所が異ふ)

さう思つた時、信長はやうやく額づき終はつて、頭を上げた。

だが、起ちあがつても、なほ無言のまゝ、歩き始めた。——馬に乗らうともせず、歩いて行くので、猿はもう辛棒がならずには叫んだ。

「殿さまア、お馬は、お馬は怎うなんですツ？」

「引いて來い。——御所のお築地まはりを、ひと巡りするのだ」

信長は、さう答へて、廣場を、築地の方へ横ぎつて行くのだつた。

(二)

拂曉の薄明りの中で、皇ら宮居に遙拜を遂げた信長は、徒歩で、内裏御所のお築地の外をまはるのである。

だんだん明るくなつてきたが、まだ人通りがなかつた。お築地は荒れてゐた。度かさなる戦亂のために、荒らされたのである。土居は崩れてゐたし、塀は壊れてゐたし、樹木は焦げてゐた。枯れてゐた。崩れても壊れても、倒れても焼けても、たゞ荒るゝに委せて、打棄つて置かれたのだ。放擲つておけば雨風が、荒廢を手傳ふ。

お築地だけではないのだ、内部のことは、申すさへ、畏れ多いし、周囲の道路などは、實に酷く破損してゐるのであつた。

(勿體ないことだ！)

信長は、しみじみと恐懼を感じた。

都の御所の御式微は、想像以上であつたのだ。洛中が兵戰の巷となつて荒らされてゐることは、百

も承知でゐたけれど、まさかこれほどとは思はなかつた。信長は、恐懼と同時に、爲政者に對する烈しい憤怒を覺えた。

(政治の責任者は幕府だ！)

歩きながら信長は、統制力の衰へ果てた幕府のことを考へてゐたが、いつの間やら十三年前に死別れた父信秀の面影が、頭の中に、泛んできた。

(父は、四千貫の獻金をして、御所の、このお築地を、すつかりと御修繕し參らせるだけの御費用に宛てたのだが……)

その獻金を持つて都へ上つたのは、平手の爺だつたと、さう思ひながら、またも崩壊したお築地の土居に目をやつて、

(禍ひの根を、抜本的に、根底的に除かないことには、いくら獻金をして、まことに恐れおほい次第だが謂はゞ、海の中へ砂を撒くやうなものだ)

と、考へた時、又左が、

「まつたく、この御有様では、殿も、先殿信秀公の御忠誠に倣つて、長きあたりへお盡しなさらねば相成りませぬな」

と、云つた。すると、

「おれは人真似は嫌ひだ」

と、信長は答へた。

「殿つ？ 人真似では御座りますまいぞ。おん父君のお心に——勤王の御精神に、尊皇の御行爲に肖らせらるゝやうにと、さう申すので御座りますよ」

又左が、抗辯した。

だが信長は、首を振つて、

「おれは人真似は厭だと申すに」

「しかし、他の事とは、事が違ひまする」

「又左。おれの勤王精神は、鐵砲を仕入れることだよ」

「え？ 鐵砲を？」

「無鐵砲では仕様がなからな。だから、あんなに買ったのだ」

「殿つ！」

「人は俺を、無鐵砲だといふけれど、おれは無鐵砲が、大嫌ひなのだ」

「御、御冗談をおつしやつては……」

「たれか迷惑でもするのか？」

その時、猿が、

「殿さまは、石山御堂を、鐵砲攻めになさるのだ」

と、大きな聲を出した。奇聲も出るが、また滅法界、大聲も出る猿面藤吉の聲帯は、變化自在なのであつた。

「猿、さう馬鹿聲を出すと、迅風が吃驚するぞ」

と、信長が微笑すると、

「そんなチャチなんぢあ御座いませんよ、なあ迅風！」

猿は、轡を取つてゐない方の手で、馬の鼻面を、撫でた。

(三)

猿は、馬の顔をさすりながら、

「どんなもんです、また金的でせうがな」

いふと、信長は、

「本願寺を攻めるのは、まだく大分さきのことだし、鐵砲の仕入様も、あんな位で足るものか。こ

のまんまで、もう十年もしたら、ほんたうに石山の門跡が、室町將軍なんぞ何處へか消し飛ばして、天下に號令するかも知れんのだ」

「はい！ やつと此間の御返辭ですかい」

猿が、莞たりとした。

「又左も、勝三も、もつと傍へ寄つて歩け。云つて聽かすから、聞いたら腦の中の、褶へ畳み込んで忘れるなよ」

さう云つてから、

「おれが、堺見物と大坂見物を先にして、京都を見るのを、わざと後廻しにしたことには、意味があつたのだ。そち等に、今日びの時勢が、どんなに間違つてゐるかを一層鋭く印象させる爲だ。いまの日本は、じつに言語道斷に誤つた日本なのだ。あの堺浦の繁華ぶりをみる。あの大坂の賑はひを見るが、いゝ。繁華して賑ふだけならまだいゝが、あの石山門跡の坊主ぶりをみる。日本中で第一番に不埒なのは、石山御堂だ、本願寺だとおれは云ひたいのだ。都から遠く離れてゐることか、わづか十里先の大坂で、かうした内裏御所の御式微を、御荒廢を、知らん顔で、あゝした榮耀榮華を極めるとは何事だ。寺が、僧侶が、あられもなしに要害無双な城郭を築いて老大な兵力を擁するといふのは、以ての外だと俺は云ふのだ。寺が不敗の軍備を構へて、教權のみならず、政治の支配權をも、日本の

中原にふるふといふことは、僧侶の本分から、とんでもなく外れた血迷ひの、僭上の沙汰だと、おれは思ふ。亂世だから、止むを得ない軍備だと、本願寺はさう云ふだらうが、それは許さるべきことではないのだ。坊主に天下の覇權を握らせていゝものか。——な、解つたであらう、其方らにも」

「あゝちよつと、待つて下さい」

と、猿が、奇聲の方を出した。

「もうこれつきりだよ、話は」

「そんなら伺ひを立てますが、殿さまは大坂見物の時には、本願寺の蓮如上人や、顯如法主を、あんな傑物はないといふやうに、大そう賞めてらつしやつた癖に、今朝はまた、途徹もなく風向が變つたのは、一體なんの所爲でせう？」

「傑物が必ずしも、正しくは無いのだ」

信長は、實際、平常とは途徹もなく風向を變へて、ほんたうに嚴肅に云つて聞かせた。

やがて、内裏御所を一周すると信長主従は、紫野の方へ、街を外れて行つた。大徳寺の側の原ツばに、ひどく荒れ古びた一構への、さう廣くもない屋敷があつた。それは山科言繼卿の住居だつたが、信長主従は、この屋敷を京都滞在中の宿にすることにした。なんの前觸れもなしに突然やつて來て、泊り込みの交渉をしたわけだが、昔、言繼卿は、尾張へ行つて、織田家に永らく世話になつたといふ

關係があつたので、むろん厭とは云へなかつた。本来なら、厭どころか、喜んで宿をする筈なのだが、言繼卿の困つた事が二つあつた。

といふのは、まづ差し當り、一天俄に掻き曇つて、沛然と大雨が降つてきたことだ。霧雨ぐらひなら怎うにか凌げるけれど、雨らしい雨だと、山科家の館の屋根では防げない。

宸殿——すなはち客間で、言繼卿は、信長と對き合　ゐたのだが、その信長の頭の上へ、水が漏れて落ちた。

(訝?)

(四)

顔が、ひやりとしたので、何だらう、變だと思つて信長は、顔をそらし上げて、天井を眺めた。

液體——と感じた最初は、鼠の小水かと思はれたが、天井を仰ぎ見た時、さうではないことが解つた。液體は、そんな鼠の排泄物といふやうな生優しい分量のものではなく、天井の隙間を傳つて流れて、そして落ちる。

ポトリ、ポトリ、仰向いてゐる顔を、忽ち水浸しにする。

(雨だ?)

雨水だ。雨洩りだ。

「これは怎うも」

と、信長が云つた。

物魂消をしない性分ながらも、屋根の下は雨の漏らないものといふ概念が、是れ見よといはぬばかりに打ち壊されたから、相當に吃驚した。古びてゐるとはいへ、こゝは宸殿なのである。公家のうちでも上流の堂上家、羽林の家に、雨が洩るとは!

信長は、濡れた顔を、手で拭つた。

穢く茶褐色によごれた畳茵が、相對してゐる。主客ふたりは、その茵に坐つてゐた。主の言繼が、「お恥しい態でな」

と、云つたが、自分は斯うした状態には、むろん慣れてゐるから手で顔を拭ふやうなそんな、無駄に類することは、しない。雨が霽れれば兎も角、降りつゞく限り、濡れるほか無いのだ。けれども、人に對しては、恥しいと同時に、氣の毒でもあつた。

すなはち是れが、歡んで宿の出来かねる理由の一つであつたし、またもう一つの理由は、どう考へても賄ひの見様が無かつたことだ。

賄ひが出来ないといふのは、食はせる物が無いからだ。食物を調へるだけの、餘裕が、なんと遺棄つても、出よう筈が無かつた。

(二十人の客)

とんだ話なのである。わが家さへ、暮しかねて、いつも北山時雨、薄ら寒いぐらゐは、我慢はしても、餓いのは怎うにも辛すぎるのだつた。

但しこれは、獨り山科家のみの窮状ではなくて、公家一般が、さうであつた。

恐れあることだが、内裏御所の御式微から推せば、もちろんこれは當然なわけなのである。

「織田殿……」

と、言繼は、寄る年波の深く皺むといふ年齢でも無いのに、朝廷への御奉公に東奔西走した折の疲勞が出たせゐか、すでに皺くちやに老衰した顔を、本意なげに歪めて、

「折角のお出でちやがのう……」

云ひ憎さうに、宿を斷りかけたのであつた。

ちやうど其時、對屋の隅の間では、

「ヒヤア大變、ひやあ大事！」

と、例の奇聲で、猿が叫んでゐた。

天井を向いて叫んでゐたのだ。

じつにおびたらしい雨漏りだつたからである。

「こりあ酷いぞ、酷いぞ！ 戸外なんでもんちあ無い！ 野天よりか烈しいぞ、やい！ 雨の奴」と、獨りで喚いた。

そこは、雑舎でも、小舎でもなかつた。館の一部である對の屋のうちだ。にも拘らず、雨水は、まるで瀧のやうに流れ落ちる。天井からの瀧水は、おまけに五本や十本でなく、幾十本かの樋を切つて落したやう。

猿は、笠を引ツ摺んだ。

廊の片隅に重ねておいた笠を、引ツ摺んだのである。

(五)

廊下を曲つた直ぐ突きあたりの室から、聲々が聞えて、

「遣り切れんな」

「びしよ濡れた」

「驚くのう」

「おツ魂消るなあ」

その時、猿が、

「笠、笠、雨笠、雨笠アー」

と、嗚鳴つた。あつただけの、持てるだけの笠を抱きかへて、とび込んできたのだ。

「やアよく気が附いたな猿」

と、又左が云つた。

「雨に笠ア付き物だい」

猿は、抱へた笠の束を、擲り出すが早い、いち早く自分でまづ被つて、

「呆れたもんだよ、えひん、ん、ん、ん！」

と、笠の紐を締める。

勝三郎が、又左へ、

「まるで野宿だの」

さう云つて、苦笑すると、

「野宿でも、木の下なら、こんなに漏りはせぬぞよ」

又左も笑ふ。

「思ひ切つて打捨らかして置けたものだ」

「まさか京都に、屋根葺職人がゐないわけでもあるまいにの」

「いかにお手許不如意だとは申せ、だよ」

「斯う、垂れ流しは恐れ入るよ」

「どうも館うちの汚れ方が、變だと思つたら是れだ！」

「香の汚れ様ではなかつたのだ」

みんなが、てんでに笠を被つたり、掲げたり。室内で、それだから、話の外だ。

まつたく猛烈な雨漏りなのである。

「だが、いくらなんでも館中が、どこも斯うでは無からうよ。おれたちが、貧乏袋を引いたのだ」

「ひどいお部屋へ、ぶち込まれたといふ譯かな」

「こんな具合だと、晩のお賄ひのお茶なんぞも、思ひ遣られるのう」

「うむ。それを考へると、だいぶ憂鬱になるよ」

すると、猿が、

「これく、意地の汚いことをいひツこなした。さういふことをいふと、田舎者と笑はれますよ」

と、奇聲をあげて、制した。

「なにを人一倍、食ひ意地の突張つてるくせに！」

と、わきから又左が、口を挟むと

「公家は喰はねど高楊枝ツていひますよ」

「そんなことをいふもんか」

又左が、可笑しがると、

「ひろん公家といへどもですね、生きてる限り、絶食は出来ませんよ、絶食はな。しかしですね、確
實に疑ひの無いことは、公家が、張り子では無いといふことです」

さう、猿が云つたので、

「なんだ、張り子ではないとは？」

と、勝三郎が訊いた。

「これはしたり、池田氏ともあらう人が、それが解らないのですか、へえ？」

猿は、顎を突き出した。

「張り子は知つてゐるけれど……」

「紙細工が、張り子でせうか？」

「さうだよ」

「公家は、紙細工ではないです」

「それはさうだな」

「だから、雨漏りは厭はんと云ふのです」

「わはッはッは！ 左様か左様か」

さすが烈しかった雨漏りも、やがて止んできた。夕立が、霽れかゝつたのである。

(六)

宸殿の雨漏りは、さまで酷くはなかつたので信長は、たゞ一度だけ天井を仰いだきりだった。體も着
物も、濡れるには濡れたが、平氣な顔である客の有様に、主の卿は、垢じみた袍の中で、ほつとした
やうに身うちを寛げた。

主客の話題は、いま小康を得てゐる都の治安についてであつたが、それを語り終ると、言繼は、
「畢竟は現將軍、義輝公の御武勇の賜で御座る」
と、結論した。

「ほう、將軍が偉いのですか」

訊くでも無し、訊かぬでも無しに、信長はさう云ふと、

「それはもう、疑ふ由も無うお傑れぢや。足利歴代の將軍中で、最も傑出しておはすのではないか、とも存ぜられまするでな」

と、卿が答へた。

「ほう、それは初耳ですね」

「なに、初耳と？」

「左様、初めて聞きましたな」

「いや、確にお偉うて在す」

「はてな、變ですね」

信長は、きよとんとした顔で云つた。

猿と始終話をしてゐるために、その話振りに自と感染したのであらうか？ げんに言繼卿に對する
信長の言葉の調子は、ほとんど猿面藤吉に似通つてゐた。

だが然し、人眞似を何よりも嫌ひな信長だつた。決して眞似をしたのでも無く、影響されたのでも無かつた。

實を云ふと、猿の話振そのものが、信長に由來してゐた。つまり猿が、信長を眞似たのだつた。してみれば、本家本元の信長がその持ち前の、獨創的な表現を、いま山科卿にひかつて用ひたまでのことだ。

「これは心得ぬことを！ なにが變ぢやと言はれまするぞ？」

と、言繼が云つた。

（この信長といふ人物こそ、變ぢや）

さう、思つたのである。

しかし、信長が、きよとんとした顔で、そんなことを云つたのは、内心暗然たるものが、あつたからだ。

（麒麟も老いては驚馬に劣るか）

これが勤王精神を鼓舞するために、諸國を遊歴した人であらうか？

（將軍義輝の、どこが偉い？）

心ひそかに呟いた時、

「織田殿。——將軍の御武勇について、貴殿が御存じないとは、なんと致したことで御座らう」と、言繼が目を見張つた。

「知らないものは、存じませぬよ」

やはり、信長は、きよとんとしたことを云つた。卿は、瞠つた眼を、こんどは撃めて、

「塚原ト傳と、上泉信綱は、共に天下の劍聖で御座る。その兩劍聖を師とたのんで、入神の技を得られし將軍の劍は、いはゆる無敵劍ちや。それを貴殿が、初耳などと云はれますのは、おとぼけの騷り言としか受けとれませぬが——？」

首を、かしげると、

「將軍の無敵劍が、一偉いのですか？」

「申すまでもなし」

「ほう、偉いと仰有る」

「とは又、異なことを」

「とは又、驚きましたね」

「これさ、織田殿！」

言繼が、再び目を瞠ると、信長は一層暗然となるのであつた。

(七)

だが信長は、ふと思ひ返した。

(京に住めば、京に化する。これが謂はゆる京都的の感情なのだ。おれは、自分から割り出して考へたが、永いこと衰微の、どん底に沈湎して、極端な物質的困窮に苛まれれば、かなり高邁な精神でも萎縮しよう。おれは、この山科卿に對して、自分を標準にしてはならないのだ。衰へ果てた都、荒れ切つた都といふことを、まづ前提にして、今の京風俗、現在の京人情から推して行つて、それで言總卿を判断しなければならぬのだ。してみれば、無氣力な公家の中で敢然立つて勤王精神を遊説したこの卿は、他のどんな點が、どうあらうと、おれはもつと尊敬するのが、本當なのだ。おれは間違つてゐた。悪かつた)

信長は、反省した。

間違つた、悪かつた、などと思ふことは、殆ど稀な信長としてはこれは、珍しい反省だつた。

(將軍義輝への認識が、いかに誤つてゐようと、そんなことは怎うでも好い。たゞ、この卿の、皇道精神にむかつて、敬へばいゝのだ)

さう感じると、眼前の、老いさらばうた言繼卿の姿が、忽ち、十八年前の記憶の面影に、置き換へられた。

ちやうど信長は、十歳の少年だつた。その年に、言繼卿は、尾張へ下向して、信長の父に、朝廷へ獻金せしめるために滞在したのであつた。

(さうだ。おれは、將軍の劍術について、この卿と話すなどは——およそ愚の骨頂ではないか)

信長が、對の屋の一室へ戻つた時は、夕立が晴れてゐた。だが、雨漏のために、床はまだ、酷く濡れてゐて、坐る場所も無いから。

猿が、

「愕ろきましたね」

と、云つた。信長は、微笑もせず、

「上方へは、愕ろきに來たのだ」

と、答へた。

「愕ろきにですか？」

「それが目的なのだ」

「成程な」

猿は、首をすくめた。

すると、又左が、

「やはり、このお屋敷に、御逗留なさいまするか？」

と、訊ねた。

「やはりとは何だッ」

信長は、叱りつけた。

「でも、先刻のやうな雨が、夜中にでも降つて參つたら、するぶん事で御座りますぞよ」

「事なものか、濡れるだけだ」

「その濡れるのが厄介で御座りますて」

「せいたくを云ふな。こゝに住んでゐる人たちのことを考へろ」

さう云はれては、又左も、返す言葉がなかつた。だが、降られたら、全く厄介だと思つた。と、意地わるくも雨は、またしても、ざあーつと烈しい音を立て、落ちて來た。本當に晴れたのではなかつたのである。

「それ、また笠の御用だッ」

と、猿が、けたましく喚いた。雨は日が暮れても、罷まなかつた。

「おい、暗いな」

「暗いよ、夜なもの」

「灯は、どうしたのだらう」

「この雨だ。ともしても消えてしまふ」

「心細いなあ！」

さう話し合ふ又左と勝三郎へ、猿が、

「灯にも笠といふ術が、無くは無ければ、この調子だと、油の買ひ置きがあるか怎うかも、怪しいものだ」

鐘 車

(一)

入洛第二日目の朝であつた。

山科家が、大遺線でこしらへた朝飯だつたが、信長は、それを食し終ると、

「猿」

と、呼んだ。

次の間から、猿が、ローばいに食物を——と云つても殆ど、お菜なしの飯だけであつたが、頬ばつてモグモグやりながら、顔を出して畏まる。

「小車の箱を持つて来い」

「——」

何か、猿は云つたらしかつたが、頬張つた飯を、まだ呑み込めずにゐた爲、ウニヤ／＼とのみで、

地言は聞きとれなかつた。

だが、言附かつた箱を持つて来た時は、むろん口の中は空になつてゐたから、「一體こんな小兒だましましたいな車を、二十箇も三十箇もお買ひになるなんて、物好きにも大抵、加減といふものがありますよ、程といふものがな。堺港でのお買物が鐵砲に玩具では、下手な判じ物みたいですからね」

と、ペラ／＼とやつたものである。

「中に、鈴も這入つてゐるか？」

「入れた鈴ですもの、這入つてゐますよ。こんなものを、誰が盗むものですか」

猿は、箱の蓋を除つた。

「紐も入れてあるか」

「這入つてゐますとも」

「車に鈴をくツ附けるのだ」

「鈴を、車にですか？」

「そちの頸ツたまに附けるとは云はん」

「頸に附けた日には、猫ですよ」

「早く附ける」

と、信長は促した。

猿は、箱から、玩具の二輪車と鈴を、一つづつ出して、紐で鈴を小さい車の臺座の下に結はひ着けながら、自分の智慧といふ智慧の總動員を試してみた。けれども駄目だつた。解らない。

（大賢は愚に似てゐるといふが……）

玩具の二輪車に鈴をつけて、怎うするのか？

額に油汗の滲みでるくらゐ、必死に考へたが、解釋の糸口さへ見つかからない。

（えゝ糞つ！）

舌打ちをして、

「殿さま、買物にも物がありますよ！」

さう云ふと、信長は、ほゝゑんで、

「そちの、長い方の刀を持つて来い」

と、命じた。

猿が、首を捻りながら、次の間から持つて来ると、信長は、その刀の鐺に、鈴を附けた車を、「結はひ着ける」

と、云つた。

「はてな？ わたしの刀の鑑にですか？」

「さうだ」

「あれ、殿さま、不可ませんよ！」

「何が不可ない？」

「はい、かう見えましても猿めの刀、決して玩具ではないのです」

「文句をいはずと、くツ附けろ」

「てこ變だなあー」

猿は、ともかく結はひ附けた。すると、

「腰へ、差すのだ。鑑さがりに、下に、引摺るやうに」

「え？ 駄目ですよ殿さま？ 鑑にこんなものが附着いてゐては、問へて、差せはしません」

「猿智慧をどこへ落ツこととして来た。中味を抜いて、鞘で差してから、拔身を納めたらいゝ。腰に差したら、歩いて見ろ」

さう云はれて、猿は、云はれた通りにした。——で、歩くと、鑑に結はひ附けられた小車が、廻つて、リン／＼リンと鈴が鳴るのだつた。

(二)

「うへえエ、成程と申したいが、こりや土臺どうなるんですか？」

「どうなるツて、鈴は相當よく鳴るよ」

「てへエ、敵はないな。鈴は鳴るやうに出来てますけれど、この方はですね、かく申す猿はですね、どう相成りますか？ 猿ネコ、だといふ洒落でもございますまいに、さりとは、些か可哀相ぢあないですか」

「戯け奴、洒落どころか、これが肝腎な護身術なのだ」

「え？ ゴシンジツ？ これが御眞實とは？」

「馬鹿ツ、術だよ。手段だよ、自己防衛のな——」

「どうも解んないな！」

と、猿は情なさうに呟いて、

「むつかし過ぎますよ、御難題すぎますよ、ほんたうにサリとは胴愁なお殿様だ！ 猿が鑑へ車と鈴をつけて、なにが自己防衛の術ですかよ、ちえツ忌々しいな！」

さう云ふと、信長は微笑しながら、

「駄くなよ猿。そちだけに使はせる術かよ。おれも使ふし、又左にも、勝三にも、みんなに用ひさせて、つまり織田主従の安全を圖るのだ。身邊の危険を、未然に防ぐことが出来れば、これに越した護身術は、無からうではないか」

と、答へた。

目から鼻へ抜ける以上にも惻かな、猿面藤吉へは、これだけ云つて聞かせれば、もう充分だつた。で、信長は、自分の佩刀、大左文字の鎧にも、小車と鈴を附けさせたのみならず、家來ども一同に同じ仕掛をさせた。

一見正氣の沙汰とは何としても思はれない装置が濟むと、信長は猿を露拂ひに真先に、立たせ、又左、勝三郎その他をつれて、雨上りの空氣さわやかな戶外へ、押し出したのであつた。

山科家の人々は、呆氣にとられた。

「あれ、あれ、あれ！」

昨日の雨漏に、信長の家來どもが膽をつぶしたよりも、一層烈しく愕いたのだ。

そして、屋敷のある言繼卿は、やはり昨日、信長が暗然となつたよりも、猶一倍、暗然と心を曇らせた。

（あゝ何たることぞや！ 桶狭間の一戦に、東海の覇者今川義元を討取つたといふ噂を聞いた時、自

分はどんなに胸が高鳴り躍つたであらう！ それほどの名將ならば、必ずや父信秀にも増して頼もし

い人となつてお呉れであらうぞ。定めし亡父の志を繼いで、自分が頼めば、再び大枚の獻金を引き

うけて朝廷へ御奉公の忠誠を、勵んで貰へるに違ひないと、さう思つたのに！ あゝなんと、それは

空しい徒喜びであつた。實にも、この有様では、桶狭間の戦以前の評判の方が、眞實だつたのだ。

大うつけた、狐を馬に乗せたやうだ、といふ噂の方が、本當であつた。これでは半氣違どころか、丸

氣違にも近い。それにしても、あの變てこれんな面つきの若黨は、ありや一體何であらう。主も主な

ら、家來も家來ぢや、一人としてあの愚しい所業を、諫める者が、ゐないのか知らず！）

言繼の、この感想に無理はなかつた。信長主従の珍妙な恰格を、目に見た京の街の人々は、ほとん

ど誰もが、すべて皆、呆然となつた。あんどぐり口を開いた揚句の果てが、腹をかへて、

「あらら、土臺ありや、何ぢや？」

「お武士ぢや」

「武士は解つてる」

「そんなら人だ。人間だ。二本足で歩いてるやないか」

「阿呆らしい。そないなこといふなら、ありや三本足ぢや」

「なに三本足ぢやと？」

「つくり附けの足が二本に、接ぎたしか、支へ棒かは知らぬけれどそれ、腰の長刀の鑑のさきに車が附いて、リン／＼と音を立て、歩いてるによつて、足は都合三本やないか」

「ほんまにな、さういふたら三本足やな」

「あれなら、なんぼ後ろへ、のけ反つても倒れやせんわ」

「喧嘩の時に、突轉ばされぬ用心かいな」

巷の人々が、呆れ罵るのを、平氣な顔で、洛中を歩き廻る信長主従だつた。

それが、毎日つゝいた。

やがて、『三本足で練り歩く頓痴氣武士』の一行は、尾張の織田の君臣だと判明すると、都の市民は、二度びつくら、御鄭寧に、膽の潰し直しをさせられたのであつた。

室町幕府に、

「尾州の信長、上洛仕り、近日参候、拜謁の榮を賜はり度」

と、届け出をしたので、そのために信長の京都に滞在してゐることが、市民にも解つたのだつた。

「鈴が鳴るから、あれでは迷ひ子になる心配はないといふものぢや」

「だけど、人を喰つたお顔つきで、わざわざ阿呆の眞似をしてさ、一體なにを見て、歩かつしやるのかなあ？」

「おらあ物數奇半分に、あとを跟けてゐたが、おどろいたのう！」

「おまへが跟いて歩いたのか？」

「信長といふ方は、腐つた死骸がよツほど好きなんだぜ！」

「え？ 腐つた死骸？ 人間の死骸をか？」

「さうぢやよ、死人がお好きなんだよ」

「へエえ、野良犬ぢやのう、まるで！」

「おらあ魂消たよ、尾張さまと御家來衆がよ、野良犬と一緒に、面を並べて、死人の體から蛆の湧いたのを、嗅いでござつた」

「まさか！」

「嘘だと思ふなら、お前も後を跟けて御覽——。おらあ氣持が、悪うなつて、ゲエツと上げさうになつたよ」

その時分の京都は、まったく沙汰の限りに荒廢してゐた。應仁の大亂に殆ど丸焼になつた市街は、舊の何分一も復興が出来なかつた。やつとこさ建て直された民家さへが、その後の戦で、またく壊されたり焼かれたりした。いつしか都の中央の、繁華な場所であるべき處々に、焼野の原が出来て、べんべん草の生えるに委せた。盛んだつた時代、榮えた頃に比べると、京都の戸數の人口も、およそ五分の一に減つてしまひ、武家大名の屋敷の大半は、森や林に變つて、そこに盜賊が、巢を作つた。夜も晝も、追剝が横行した。押込強盜は、町の人々を戦慄させた。いたるところで辻斬があつたし、飢え死をする窮民が絶えなかつたし、時々、大仕掛の殺人が行はれた。だから、巷には死骸が累々と横はつた。それが町家の附近なら、取片附もされるが、いま云つた焼野の原では、そのまゝ腐つて白骨になるか、犬に喰はれたり、鳥に啄ばまれたりするほか無かつた。——要するに、京都は、首府の資格を失つて、ほんたうに絶望的な有様に顛落してゐたのだつた。

(四)

ある日の午後のこと。

信長と、その家來どもは、相變らず鎧車を引きすりながら坂を——勾配の緩い、長い坂道を登つて行つた。

のぼりつめると、そこは清水寺であつた。

「音羽山清水寺だ」

と、信長が云つた時、猿が、

「十一面、千手千眼の觀音さまだ」

と又左の顔を振返つて叫んだ。

「感心に知つてゐるな」

又左が、笑ふと、信長は、

「坂上の田村鷹の建立だよ」

さう教へると、

「だから、坂の上にある」

猿が、勝三郎へ嘯いて見せた。

「坂上田村鷹が、光仁帝の寶龜年間に、初めて本尊を安置したのが基で、その後、桓武の帝の、平安

遷都があつて、舊都長岡京の紫宸殿は、これを田村麿に賜はつたのであるが、田村麿はこの紫宸殿をこゝ音羽に移して、勅願道場の本堂としたといふのが、縁起だつた。

「東寺の塔のむかふに、河内の山が見える」と、信長が指さした。

「あの霞んでをる山が、金剛山で御座りますか？」

「金剛山と峰つゞき、尾根つゞきの山だ」

信長が、さう又左に云つて聞かせる横合から、またも猿が、割込んで、

「大昔の大忠臣、坂上の田村麿の建てたお寺から、中昔の大忠臣、楠の正成が、義兵をあげた金剛山を、眺めたのが今の世の、織田の信長と御座い、東西々々！」

と、喚いた。

「喧しいな！」

信長は苦笑した。だが、猿の頓狂な言葉は、信長の抱負に觸れてゐた。

たゞ然し、信長の抱負は、はるかに田村麿の功業を凌がすには措かぬほど遠大だつたし、また楠の忠義が消極的であつたに對して、信長の尊王の抱負は、はなはだ積極性を帯びたものだつた。正成の志は純真無比ではあつたが、しかし、それだけに政治的ではなかつた。ところが、信長の志は

複雑だつた。政治的であり、経済的であり、根本的な建直しのためには、徹底的な破壊をも厭はぬと云ふ、あくまで逞しいものであつた。

信長主従が「清水の舞臺」に立つて、眺めてゐた時、舞臺の眞下で、「音羽の瀧」を見物してゐる態の武士たち——十人ほどの、「お上り」風に見える、田舎武士の一行があつた。

そのうちの頭めく男——かなり老體と思はれるのが、

「とても望みなしぢや！」

と、呟いた。

「では、お諦めで御座るか？」

「不本意ながら」

「しかし歸國して、館にまみえる面目を——いかに成されますか？」

さう云つたのは、一行中では矢張、頭株らしい士だつた。

「面目は、丸潰れぢや。だが、已むを得ないではないか」

「已むを得ぬではお弱氣に、すぎはせぬか？」

「弱氣に、ならざるを得ないのだ。わしの劍法至上主義は、無念ながら信長の爲に、木ツ葉微塵に、たゞき壊されてしまつた。信長こそは、じつに稀代の怪物ぢや。わしの練磨の劍をもつてしても、到

底勝ち難いことが、解つたのだ」

梅津玄旨齋は、鑑車の珍妙な扮装を、自分の眼で見た刹那から、猫の前の鼠のやうに、まったく氣壓されたのであつた。

(五)

こゝに記すことさへが、恐懼の極みではあるが、皇紀二一六〇年に、人皇百二代、後土御門帝の崩御あらせられた御時は、大喪の禮を行はせらるゝ御費用に事缺いて、内裡の黒戸に殯し奉つて四十何日に及んだといふ。そして、後柏原天皇、御歳祚あそばしたけれども、御即位の大典がなかつた。

この事については、全く言ふべき言葉が見つからない。

勿體無きの極限の、お式微は、後奈良帝の御代にも同様であつたし、つぎの、百五代、正親町帝の御歳祚となつても、やはり依然變りが無かつた。

今年——永祿の四年における、今上陛下は、この、正親町帝でわたらせられたが、去年の正月二十七日に御即位の大禮を挙げさせ給うた御には、毛利元就の獻金が、お役に立つたのだつた。

實に慥かほしい斯うした状態の因つて來た所の、最も重大な責めは、足利幕府が、これを負ふべき

であることは勿論だ。しかし、幕府は有つても無いに齊しいのであつた。もはや、存在の實質が失せてゐたのだ。

應仁の亂までは、まがりなりにも法制が、物を云つた。が、亂以後は、たゞ亂脈の二字に竭きてゐた。將軍義政が、東山に隱居して、その子義尙が九代目を繼いだまでは未しもであつたが、十代目を繼いだ義植は征夷大將軍たること僅か四年で、越中へ出奔したのだ。將軍の出奔などは、まことに訝しな話だ。この義植は、東山義政の弟、義視の子で、出奔後は越中から周防へ流れて行つて、大内氏を頼つた。で、大内義興が、入京して、義植を將軍に再補させた。だが、十一代將軍は義隆だつた。といふのは、決して義隆が將軍を罷めたわけでは無かつたからだ。

つまり、將軍が、同時に二人あつたのだ。

逆戻りの將軍に對して、頑張つた居据りの將軍義隆は、やはり東山義政の弟の堀河御所、政知の子だから、二人將軍は從兄同士だつた。

この二人將軍、どちらも最後が慘めだ。一方は江州の岳山で死んだし、一方は阿波の撫養で往生を遂げた。

つぎの十二代將軍義晴は、江州で死んだ方の、すなはち義隆の子だつた。そして、現將軍、十三代義輝は、この義晴の子であるから、父から將軍職を譲られたわけだが、譲つた父は、江州の穴太の

山の中で死んでゐる。してみれば、義輝の不仕合せは云ふまでもなからう。

出奔したり、流浪したり、山の中で死んで、葬式も出なかつたり——。それが、征夷大將軍、天下の政府の元首なのであるから、驚かれる。

義輝將軍は、

(信長が見えたら、自分の運の開けるやうに、ひとつ頼んでみよう)

と、思つた。

で、信長が、室町御所へ伺候した時、

「桶狭間の勇名は、都へも響いてをる。このたび上洛の志、神妙なり。よつて従五位の上に叙し、

彈正忠に任するぞよ」

さう、云つたものだ。

將軍が引見して、自ら親しく言葉を與へたのだから、本來ならば名譽至極、

「身に餘る光榮——」

と、有難がらなければならぬのであるが、なにしろ今謂つたやうな體裁の足利將軍と、おまけに

片方は信長だ。

だから、まるで話にならなう。

信長は、碌すつば頭も下げなかつた。

(六)

もし足利義輝が、將軍家の子に生まれなかつたとしたら、もつと遙かに幸福な生涯を過ごせたであらう。すくなくとも、どのくらゐ有意義な生き方が出来たか知れなかつたらう。義輝は決して凡庸な天性ではなかつた。決して低劣な資質の人物とは云へないのであつた。

だが、柳營の貴公子として生を受けたのが悪かつた。なんとしても救はれがたい不幸だつた。

人は、名門に生まれたが爲に、その門閥の爲に、幸ひされて、實力以上な仕事が出来、實質以上に評價されることも屢々あるが、また往々、それが爲に、すなはち名家の出であるが故に、たとへば義輝のやうに禍ひされることもある。

彼、義輝は、幼名を菊童丸といつて、天文十五年に、齡十一で將軍職を繼いだが、すぐ翌年、細川晴元に追はれて近江に難を避けた。そして翌くる年は、どうやら京都へ戻れたと思ふ間もなく、またも三好長慶のために追ひ出されて、再び近江の坂本へ走り、天文二十一年、やうやくのことで長慶と和睦が成つて歸洛が叶つた。と思ふと、これがまた標喜びで、翌二十二年になるが早い、三たび都

から出奔しなければならなかつた。この時も、追ん出しの敵役は、三好長慶が勤めた。

どんなに勢威が衰へたと云つても、苟くも征夷大將軍と名のつく者を、重ねて追ひ出したといふことになれば、敵役にも自づと尾緒が附いて、どつしりと貫祿が出来る。

陪臣だつた三好長慶は、俄ぜん、のして来て、自分の主君だつた管領、細川家を凌いで、近畿では押しも押されもしない巨大な大名に成り上つてしまつた。

「諸事萬端、なにごとによらず、拙者の言葉をおん用ひあるに於いては、御歸洛も苦しからず」さう、長慶は、義輝將軍へ言つてやつたのだ。

「苦しからず」では、どつちが將軍なのか、譯が分らない。

しかし、主從顛倒だ、そんな馬鹿げた事が——などと云つてゐた日には、いつまで待つても室町御所へは戻れない。父の義晴みために、穴太の山の中で、みじめ慘憺たる最後は遂げたくないと思ふ義輝は、この長慶の「下刻上」を（時世時節だ）と、考へるほか無いのであつた。

もはや花の御所どころではない室町ながら、柳營の生活は戀しかつた。

で、屈辱を忍び、長慶の潜上に眼をつぶり、和睦まで、やつとこき漕ぎつけて、京都住まひに戻つたのが、永祿元年。

義輝、二十三歳の冬十一月だ。

塚原卜傳を師匠として、新當流——卜傳流の秘劍を傳授されたのは、天文二十一年から翌年にかけての事だつたとすれば、義輝の十七八歳の時だ。また、おなじく劍聖として天下無敵の聞えが高かつた上泉伊勢守信綱に師事したのは、あきらかに永祿元年以後——近江から都へ歸つてからのことだから、劍法の奥儀を授かるには、ちやうど詭へ向きの年頃だつた。

師匠も無類であつたが、義輝將軍の上達ぶりも亦、素敵——。

「打物とつて上様に、刃向ふ敵は天下廣しといへども、有る筈が無く」人々は、異口同音に、云つたものだ。

まつたく義輝の劍技は、至藝だつた。斷じて、謂はゆる上様藝ではなくて、眞に名人の域に入つてゐた。

（だが、しかしながらだ、將軍が刀を振り廻しても始まらない！ 長慶の奴の横暴を、どうすることも出来ぬではないか）

さう、思つたのは、信長だつたのである。

(一)

「然らば玄旨齋は、隙が信長に微塵も兎の毛の先も、なかつたと申すのか？」

「左様、とんの詰りはな」

「なに、とんの詰局は？ うつけ放心隙だらけと見えても實は、用心堅固であつたといふ意味か！」

美濃稻葉山の太守、齋藤義龍の聲は、すつかり噎れて、潰れてゐた。

梅津玄旨齋は、

(よほど性質の悪い風邪らしう)

さう思ひながら、

「畢竟、結果においては同じことに相成りませうが、信長には用心といふものが皆無なので御座る。

これは寔に偉大なる虚無で御座ります。申さば、虚空の空漠々たる如く、大氣の形無きが如く、無し

と見えて其實、實質においては壓倒的な形容を有してをります。拙者は、拙者の劍の無力を悟つて歸國仕つた。信長を斬れと仰せらるゝは、空気を斬れと仰有るのと變りませぬ」

「玄旨齋！ 予は御許から、老莊の學徒めく言葉を聽かうとは思はぬ。討てなかつた理由を、あからさまに申せ、お許の技を以つてちや、信長側近の前田、池田といふやうな若輩を懼れしことが、心得かねる」

義龍が、さう云ふと、玄旨齋の後ろに坐つてゐた小牧源太が、

「恐れながら館」

と、口を挟む。

「うむ」

「信長主従は、只今申上げし通り石部の宿の襲撃を忘れ果てたものゝやうに、いとも太平樂な面つきにて、兩戸も扉も、開け放し、上げッ放しの宿所に寝てゐたので御座ります。その宿所と申すのは、山科言繼卿の屋敷で御座りましたが、これが實に言語に絶した破ら家で、雨は漏り放題、風は吹き通し、戸は開けッばなし、と申しますのは、立附が損み壊れて、閉まらない所爲でも、御座りましたらう。ともかくも無用心、この上なしの宿に寝て、晝は晝で、鈴つきの玩具の車を腰刀の鐙につけて、歩けば引摺る、引摺れば鈴が鳴ります。京都の町人は、あれよ、あれよと笑ひます。何びとも呆氣

にとられまする」

「小牧！ 玩具の車を、信長は鎧で引摺って歩いたのか、都大路を？」

「大路も小路も、所嫌はず」

「ふうむ、ところ嫌はず！」

「さすがの玄旨齋殿も、これでは討てぬ、諦めるほか無いと、断念なされた次第で——」

「なんといふ事だ、玩具の車びき！」

義龍は、さう呟きつゝ、眼を瞑ぢた。

（頑敵ぢや！）

まったく豫期以上に怖るべき敵だ、と感じたのである。

桶狭間で大勝した信長を、義龍が何で甘く見よう？ 勿論、怖れた。心を塞くした。恐怖をおぼえ

たからこそ、暗殺といふ手段を選んだのであつた。それほど重視しただけに、暗殺も到底だめ、行

ひ難いことが、今、玄旨齋と小牧源太によつて報告されてみると、失望も大きかつた。

（暗殺が不可能なら……）

どうする？

まともに戦をする以外、打倒の道があるか？

（おれは、道三を殺してゐる。道三は、信長の妻濃姫の父だ）

義龍は、濃姫の父のみか、母をも、兄弟をも皆殺しにしたのだ。

（信長は、攻めて来るに違ひないが……）

(二)

攻めて来るとすれば……

（機先を制して此方から、木曾川を渡つて尾張へ、侵した方が宜いか、それとも敵兵を國內に引き

いれて、逸を以つて勞を撃つ方が宜からうか？）

（先手が利か、後手が得か——それを義龍は毎日々々考へてゐた。

考へてゐる間に、稲葉の山の南斜面には、桃の花の紅色が、白い木蘭の花と咲き交り、やがて北側

の山ふところの櫻林の梢にも、くれなるの霞が棚びくと見え、春告げ鳥の影が、なんとなく温やかに窓の障子に映るのだつた。

だが、義龍は自然の風物とは全然不調和な、さびざびしい、暗黒な氣持で、とつおいつ思案に暮れ

そして花は、桃から李へ、櫻から空木花へ移つて、卯月曇りが爽やかな阜月晴れの青空を見せるやうになつても、心は、陰惨に、むすばれるばかり。

決して義龍は、踏ん切りの悪い性格ではなかつたのに、この不決断は、そも何がさせた業か？

いふまでもなく、信長は強敵だつた。今川義元の首を獲たことによつて、織田の強さは俄然、隣國を、中部日本を震撼させた。これに對して輕舉は無論、いましめなければならぬが、さりとして又、荏苒と徒らに日を費すことは、あせつて妄りに動くよりも、もつと悪かつたかも知れない。義龍自身でも、

(おれの考へ方は誤つてゐた)

と、さう思はずにはゐられなく成つてきた。

清洲の城に入り込ませてある女間諜の、照葉が、報せて寄越したところに據れば、織田は頻に戦備をととのへてゐるといふ。

對・美濃戦に備へるために違ひないと、情報を引きつゞいて這入つて來る。

(暗殺をはかる代りに、信長の不在を窺つて、大軍を尾張へ侵入させたら宜かつたらうに！)

しかし、今となつては、六日の菖蒲だつた。又ちやうど其頃は義龍の頭が、殆んど惑亂して、自分ながら狂ふのではないかと、怕れた程で、何事によらず正確に判断が出来なくなつてゐたのだつた。

なぜかといふと、それには二つの重大な理由があつた。

まづ、その一つから説明すると――

美濃禪林の紛糾が、異常に頭を悩ましたことだ。義龍みづから蒔いた種によつて、この宗門のごたごたが生じたからだ、といふのは義龍が傳燈寺の別傳和尚を庇護するの餘りに、美濃一國內の禪寺の總てを、この別傳の傳燈寺の下に附屬させようとしたこと、それが因になつて、とても治まりが附かぬ状態に立ち至つた。寺々が一齊に反抗したのだ。

だが、氣性の烈しい義龍は、我を曲げなかつた。遮二無二おさへつけて、服従させようとしたばかりか、京都へ、使者を立て、

「傳燈寺を五山に列し、勅奏して紫衣を別傳に賜はるやう」と、義輝將軍に乞うたのであつた。

美濃の禪林はまるで、煮えくり返るが如くに憤つた。

「なにを坊主めらが！」

義龍も眞赤になつて怒つた。

憤りが打ツつかれば、火華が散る。

しかも厄介なことには、この火華、すこぶる陰性だつた。

義龍・對・禪寺聯合の争ひが、なぜ陰性だったかといふと、それは禪寺が武力を持つてゐないからであつた。

もし禪寺に、相當に戦へるだけの兵力があれば、無論のこと、戦が起つたらう。たとへば、大坂の本願寺のやうに、また伊勢長島の門徒等のごとく、あるひは加賀の一向宗のごとく、強大なる兵力を擁してゐたとすれば、寺方でも戦つたであらうし、義龍もまた攻めたであらうから、火華の散り方がパツぱつと陽性になる。

さうなら、義龍は格別、頭を苦しめずにも濟んだに違ひないが、美濃に限らず禪宗は何處においても、武力を持たなかつた。兵を養つて置かない禪寺を、いかに腹が立つたにしても、無闇に攻める譯には行かないとすれば、非武装といふことが、却つて強味になる。

非武装が、どんな場合にも強味だとは決して云へないが、すくなくとも義龍に對する美濃禪宗の場合、あきらかにそれが有利だつた。

義龍は、そのために苦慮した。

そもく美濃の禪宗は、名僧、悟溪宗頓が應仁元年に瑞龍寺を開山して、その法弟の八哲を、八箇寺に分けて住職させたので、宗風の傳播は、すこぶる旺盛だつた。したがつて義龍が、美濃一國內の禪寺のすべてを、傳燈寺の門下にしようとした強壓に對しては、頑として反抗した。本寺である瑞龍寺には、二十數箇寺の長老が集まつて、宗議を決した。この決議の音頭とりは、長良の崇福寺の快川長老だつた。

つまり、義龍と、快川長老とが對立したわけだ。

快川は、學殖のふかさと、膽の据つた點で、抜群の傑僧だつた。後に、甲府の惠林寺で、自分の軀を火の中に入れ、端然と坐して、

「心頭、滅却すれば火、おのづから涼し」

と、云ひつゝ往生を遂げたといふほどの、器宇豪壯な、あくまでも禪僧らしい人物であつたから、敢て義龍に屈する氣色がなかつた。

で、もう一つ——義龍の苦しみの、第二の理由だが、これこそは實に重大な、全く怎うにもならぬ性質のものであつた。

ほかでもない。彼の肉體が、腐り出したことだ。彼は癩病に罹つたのである。これ無くば、傳燈寺事件による快川との争ひも、さまで暗澹たる心境へ、彼を突き落しはしなかつ

だらう。

癩病といふ癒しがたい業病を、義龍は、遺傳して自ら發病したものやら、あるひは、父母からの遺傳ではなくて、誰からか感染したものやら、それは自分にも解らなかつたし、典藥たちにも判断が附かないのであつた。しかし、いづれにしても、義龍の軀は壞疽し始めたのだ。

(世の中で最も忌まはしい悪病！ 最も怖ろしい難病！)

生きながら腐つて死ぬのである。

身の丈、六尺五寸、坐つた膝の高さ一尺にも餘るといふ、まるで仁王のやうな巨大な肉體が立ち腐れする。

剛情我慢の義龍も堪らなかつた。

(ちえゝ業病よ！ だが負けるものかツ)

齒齧みをしてみても、病には、なんとして勝てよう。

醫師たちは、手に手を竭したけれども、効が見えない。

(こんな悪性な、急劇な壞疽れかたが有らうか?)

病勢は、さながら奔馬のやうに進むのであつた。

(四)

「なに、快川が出奔したと申すか？」

「は。行方知れませぬ」

と、日根野備中が答へた。

「おのれ圖太い賣僧め！ よくも寺まで捨て去つて……どこまでも予に楯衝くのか。年頃日頃被つた恩を、あくまで仇で返す氣よな、えつ腹がたつ、憎い奴だツ、坊主と思へばこそ去年、明智一黨を退治た折、助くべきでなかつた命をも助けて遣はしたのみならず、依ぜん我が膝元の長良の村に、崇福寺の住職たることを認めてやつたではないか。その大恩を忘れをつて、ちえゝ怎うするか見いッ！」

義龍は、おぼえず叫んだ。

快川長老は、法名を紹喜といつて、明智氏の出であつた。道三滅亡の亂の時、明智氏は即ち道三夫人(信長の妻濃姫の母)の實家であつたから、義龍は稻葉山を占領した餘勢を驅つて、明智の城を圍み、つひにこれを落城させた。城主の明智入道は割腹した。一族郎黨は、こそつて主君と城とに殉じた。たゞ光秀と光春とが、わづかに落ちのびて生き残つたのみだ。だが、見つかつては勿論殺される

ので、故郷を離れて流浪の旅に出なければならなかつた。で、明智の遺族といへば、外孫では、尾張の濃姫——たゞし是れは關係が間接になるので、直接の身寄としては、ひとり快川紹喜が佛門にあるだけであつた。

光秀からいふと、快川は義の叔父に當つてゐた。

で、快川は、義龍のために、俗縁の骨肉を全滅させられたわけだから、傳燈寺問題が起らなかつたにしても、結局何等かの破綻なしには、過ごせなかつたであらう仇敵同志だつた。

「館！」

「草を分けても探し出せ」

「明智の没落を、ふかく怨んでをればこそで御座ります。別傳和尚を擯斥いたすとき、かの御坊の眼には、かならず明智の城を焼かれた折の、焰々たる炎が見え、宗宿入道の斷末魔の、呪々しい顔つきが、見えるに相違ござりませぬ」

日根野備中が、さう云ふと、

「む、なまじ不憫をかけ、手心を加へたのが悪かつたのだ」

「館は、寺を捨てたと仰せられましたたが、たゞ逐電して此儘終はるやうな快川では御座りませぬぞ」
「さればちや」



と、義龍が、壞疽の腐爛に膏藥を貼つた顔を、痛ましく歪めた。

日根野は、すぐ附け足して、

「二十幾人の長老連が、すべて皆行方を晦ましたのは、快川と策謀して京都へのぼり、本山妙心寺の貫主へ直々に、訴訟いたすためかと思はれますが……」

と、云つた。

「うむ、或ひはな」

「いや、疑ひもなく」

備中守は、自分の察見の妥當さを、主張した。

それを聞いてゐた義龍が、

「然らば」

と、頷いた。

「相當人數を上洛させて、引ッ捕へろ」

命じたのであるが、

「然し」

日根野は、頭を振つて、

「それは穩かで御座りませぬ」

「穩便には、もう行かなくなつたのだ」

「館。——京都に御惡名が立ちましては、行く行く非常な御不利で御座りませうぞ」

(五)

(なにが行く行くだ。暗い死が、つひ鼻の先に待つてゐるではないか)

義龍は、將來の不利、なにものぞと思つたのである。

(京都の評判を苦にするのは、志を中原へ伸べようとすればこそだ。兵を提げて、近江から京都へ入り、近畿を討ち靡けて將軍を輔佐し、幕府の威令を昔に戻し、自分みづからは、管領の家に代つて諸國に號令しようと、さう考へ、さう望めばこそ、都での人氣といふことに、心を置かねばならぬのだが、すでに斯うした惡病にとりつかれては……)

嗚呼、肉體が腐り、命が蝕まれ竭すのだ。もはや餘命は、いくばくもあるまい。

(命あつてこそその將來だ！)

都の人々に何と罵られようと、儘よ、あの賣僧めの、快川坊主を引ッ捕へて、

(佛罰が何だ、當らば當れ！)

八つ裂きにして、この業腹を癒やす事に置くべきか。

義龍が、斯う思つて、日根野備中に云ひつけて、快川長老を捕へさせに人数を京都へ上らせたのは四月半のことだつたが、快川は本山妙心寺に匿まはれてゐたから、捕まるどころか、あべこべに、本山から美濃、尾張二箇國の禪林三派の寺々へ、傳燈寺の別傳和尚を除籍した旨を、通告して來たのであつた。

それが、五月の初め——もう夏の盛りだつた。

気温の上昇は、義龍の悪病には酷く影響した。

さうでなくてさへ奔馬のやうに進んできた病勢は、こゝでまた一層飛躍的に募りを見せた。(だめだ！)

義龍は、呻いた。

絶望の底なし穴へ、ふかく深く真逆さまに落下する氣持で、ひなしく跳きながらも、

「おのれ糞坊主ツ！」

と、快川を罵らすにはゐられなかつた。

生きる望みが無くなれば無くなるほど、快川長老を憎む心が烈しくなる。

「あの賣僧めを、是が非でも引ッ捕まへろ！ どんな無理をしても構はん、構ふものかツ！」

義龍は、さう叫んだのである。

だが、すでに咽喉が、聲帯が、癩に胃された爲に殆ど潰れてしまつて、叫び聲が、叫び聲にならなかつた。

口は開いて動いた。けれども聲は自分の耳にも、他人の耳にも、はつきりとは聞きとれない。

(ちえゝ聲までが、腐り潰れたのかツ！)

と思ふと、忽ち坊主憎さが、快川憎さが、病ひ呪はしさ、わが軀忌はしさに激變するのであつた。

(あゝ何としよう、治す醫者は無いものか、癒す藥が絶対に無いのかツ！)

呪はしさの對象が、醫藥へ移つた。

かと思ふと、また坊主が、快川が、頭の中に戻つてきて、こんがらかる。

「糞醫者め、屎坊主めツ！」

と、叫べない咽で、響かない聲で、叫び喚いた。

「日根野つ、お許出向いて行つて引ッ捕へろ、引ッ括れツ！」

その言葉を、辛うじて聞きとつた日根野備中は、

「館つ、それは御無理と申すもの！」

と、諫めた。

「無理が槍でも押ッ通せッ！」

義龍の頭は、ほんたうに狂ひさうであつた。

(六)

御式微は、宮廷であり、衰頹は京都の市街であつて、決して寺院ではなかつた。寺々は昔どほり榮えてゐたのだ。

だから妙心寺を威嚇するだけの人数と云へば、かなり多数でなければならぬ。しかし、さうした多数の人数を、戦國の世に、他國他領を通過せしめ得るものではない。むろん諒解が附けば別だが、よほど親善な間柄でなくては、さういふ諒解は困難だ。

(御悪疾のために、館は亢奮なされすぎてゐる。御無理もないが、仰有ることは御無理だ。が、こゝで争ふのは愚だ。長まつておいて人数を送らなければいゝ。訊かれたら、送りましてと云つて胡麻化せば済む)

さう、日根野備中は思つた。

「しからは、仰せ通りに取謀らひまする」

備中が退ると、義龍は、居間の椽側へ出て、妻戸のわきに吊り下がつてゐる魚板を、木の小槌で打つた。近侍を呼んだのである。

聲が、噎れ潰れてからは、人を呼ぶ時は、この魚板を叩いた。一つ叩けば小姓、二つ叩けば近侍、三つの時は、といふやうに定めてあつた。

やがて、近侍の一人が、妻戸口に現れると、

「典薬どもを、これへ」

と、云つた。近侍は、やつと聞きとつて、退つて行くと、間もなく典薬玄通が、這入つてきた。脇息に靠れてゐた義龍は、顎と手で、近く寄れといふことを示して、典薬をすぐ側に坐らせて、

「其方ひとりか。――まあ一人でも宜い。餘の儀でもないが、いつぞやの、秘薬のことぢや。其方達が、きつく諫めたによつて、一旦は予も思ひ止まつた。なれど、つらつら考へれば、あの秘薬を蔵しながら、藥効を疑ひ、作用を怕れて、服用せぬといふことは、あまりにも臆病ぢや。予は、其方らが何と云はうと、飲まうと思ふのだ」

と、云つた。

聞いてゐるうちに、典薬玄通の顔は、灰色になつたり、茶ツ葉のやうに變つたりした。そして體を

怖氣立たせつゝ、

「と、と、とんでもない思召しで御座ります。あれは毒藥、疑ひもない猛毒、命とりの劇藥に相違ござりませぬ。あれを召したら立ち所にお命が、御一命が、失はれまするぞ」と、聲を顫はせた。

秘藥といふのは、故山城入道三の遺した藥箱の底から出たもので、包み紙の表には「癩病秘藥」と書かれてあつたから、藥物に關しては深い知識を持つてゐた道三自身が、こしらへて置いたものに違ひなかつた。が、何を調合したものやら、いかなる成分のものやら、典藥たちにも解らなかつた。しかし、斑猫の背のやうにどす黒く底光りのする、不思議な青綠色は、直に猛烈な毒性を感じさせたし、その極少量が、見るまに一疋の猫を斃死させたのだつた。

だが今は、諫めも聞かばこそその義龍であつた。

(猛毒にもせよ、おれは飲むぞ！)

不治の癩——癒やすべき藥の皆無な難病には、毒藥でも飲むほか、病と闘ふ途は無からうではないか。さう思つたのである。

で、義龍は、玄通へ、

「退れ。退つてよし」

と、云つた。

(面倒だ！)と、感じたからだ。

「では拙老の言葉、夢お忘れなき様——」

「む」

義龍は、唯、頷いた。心のうちでは、

(今夜こそ！)

(七)

今夜こそ飲まうと、思ひさだめたのであつた。

日の長い最中だったので、日暮れが待ち遠しかつた。——なぜ、夜になつてから藥を飲まうと考へたのかは、自身にも餘り明瞭はしなかつた。たゞ何となく晝の間は飲む氣になれなかつた。

これは鳥渡、妙な心理のやうだが、出来るだけ人を避けたがるのは、癩患者に通有な氣持でもあらうか。義龍もその例に漏れず、發病以來は、絶對に女を近づけなかつたし、男も極く少數の重臣と、小姓と近侍と、典藥と、祐筆ぐらゐる。會ふ人の數は知れたものだつた。要するに醜怪な有様を、人目

に嫌したくない。逢ひたくない。そばに人を置きたくない。さういふ氣持だったのである。

とすれば、服薬の時刻を、夜に選んだといふ心の動向も、ほど頷かれる。

近侍たゞ一人に給仕させて、いとも淋しい夕餉をすますと、やがて、蚊の唸り音が聞えて、灯が點り、夏の夜は、もう更けたのであつた。

蚊遣りも焚かぬ居間に、義龍は脇息に靠れ倚つてゐた。

巨體のぐるりに、蚊は舞をまつてゐたが、義龍は追ひもしなかつた。今年には蚊が苦にならなかつたといふのは、刺されても、皮膚が悪質のために知覺を麻痺させられたのであらうが、痛くも痒くもなかつたから、平氣なのは當然だつたし、また精神的にも蚊などを苦にするだけの、そんな餘裕は無くなつてゐた所爲もあつたらう。

義龍は、かなり長時間、脇息に靠れたまゝの姿勢で、眼をつぶつて、まるで眠つたやうに動かすにゐたが、眞夜中——子の刻ごろと思はれた時、くわつと目を見開いて、わきに置いてあつた手函の中から、薬の紙包を出して、それを披いた。

件の秘薬だ。

ちいつと眺める。

斑猫色の灰黒色に、赤と緑が、またらに毒々しく混つたやうに見える、奇異な色彩。

灯の火尖が、チラ／＼揺れるたびに、底光るその赤と、緑とが、一種の妖氣を溢へるかのやうに、怪しく低迷して見えた。

どう見ても、斷じて世の常の色合ではなかつた。

(毒! 毒薬!)

さう、心に眩きながらも、

(むろん、猛毒を含む劇薬にちがひないが、毒を制するには毒を以てするほか無からうではないかと、思った。これはすでに幾度も、晝間以來、くり返し繰り返して、さう思つたことであつた。

だが義龍は、披けた薬の包を、一たん閉ぢて、下に置き、それから同じ形の薬包を、いくつも入れてあつた袋を、手に取り上げて、その袋——すなはち上包の、表面に書かれてある『癩病秘薬』といふ文字を、眺めた。

これもまた、眺め直したのである。

しかし何度ながめ返しても、山城入道道三の筆蹟に相違ないのだつた。

(間違ひない、確に。道三の處方なら、信じていゝ!)

義龍は、再び薬の紙包を披いた。そして片手を延ばして、水差を掴んで、口に水を含むと、顔を仰向けて、その紙包の秘薬を、水と

一緒に、ぐつと咽喉へ、胃袋へ、飲み下した。

(八)

(呑んだ！)

グウツと嚙み下す時、食道の管は厭に葢辛い、なにか刺されるやうな熱感をおぼえた義龍は、

(おれは劇薬を、飲んだのだ！)

さう、幾度も頭で繰りかへしながら、目を空間の或る一點に据ゑて、しばらく呼吸を止めてゐた。だが、食道の管に感じた熱感が、胃袋の壁に移つて行つたほかには、別段の異状がなかつた。

(いま呑んだ劇薬が、果して俺の生命を、立ちどころに潰滅させるか、それとも不治の病魔を壓倒して、この俺の肉體を、壞疽の悪疾から救つて呉れるか？)

まさに、運命の重大な岐れ路に立つてゐる。と、義龍は思つた。

あたりは寂莫——閑として物音が絶えてゐた。

(薬物學に關する道三の知識は、ほんたうに驚異に値した。道三の醫術は、まつたく専門家どもを凌いだ。どこで、どうして、その知識や術やを、修め得たかは解らぬが道三はそれを、彼の立身の資本

にしたのだ。天秤擔ぎの、油賣りの匹夫から身をおこして、美濃一國の太守にまで成上つたのは、彼の梟猛と、悪辣と、暴虐と、詐欺——あらゆる兇惡を敢てして、おれの生れた土岐の家を、亡ぼしたからであつたが、然し、不思議に効く彼の醫術が、民衆の心を、巧に捉らへたといふことも、見遁せないのだ。その道三が處方した「秘薬」だ。きつと効く！)

「かならず効く！」

と、口のなかで、呟いたのである。

(もしこの薬が、効き目を現すならば、なんといふ皮肉な輪廻であらう)

とも、思はれた。

(實の父の仇、家の敵にもせよ、生れ出てから三十年のあひだ、子と呼ばれ、父と呼ばれてきた養父道三を、殺したのは俺だ。この義龍だ！ しかるに不治の業病が、道三の處方の「秘薬」で、もし治るとすれば！)

たしかに輪廻は、應報の軌道から外れて、苦肉な路を、逆に行く。

道三は、土岐頼藝を滅して愛妾三芳野を胃し、三芳野が産んだ頼藝の子義龍は、父の敵、母の管である道三を、長良川べりに屠り殺した。道三は養父だし、義龍は養子だが、いまは幽冥、ところを隔て、すでに五年たつたとはいへ、二重の仇敵同士なのである。果して道三の遺した「癩病秘薬」は

義龍を救ふであらうか？

「呀、痛つ！」

と、いきなり、義龍は叫んだ。

挫けた咽で、喚いたのだ。

(痛い、痛い、痛い！)

突如として襲つて来た、悍猛な苦痛！

體の中の中樞から、手足の先の末梢まで、たゞ一週に幾百千本の鋭い三ツ目錐で、キリキリきりつと、揉み刺されるかのやうな、じつに猛烈な苦痛なのであつた。

たちまち、全身は、ビリビリツと痙攣した。

俄然、骨々節々が、メリメリめりつと、押ツべし折られるやうな、この世のものとは思はぬ、苦悶が来た。

(あゝ死、死、死滅！)

義龍は、總身を掃蕩させながら、仆れた體で、ごろごろ轉げた。蝦のやうに曲つた。

尺取蟲のやうに、伸び縮みした。



と——灼けるやうな何物か、胸へ、咽へ、こみ上げて、
「ゲエツッ！」
黒血の吐瀉だ。

(九)

うねる浪のごとく肩が、起伏した。起伏のたびに、吐瀉が続いた。黒、赤、褐、黄、紫——謂はゞ五彩の、吐瀉液である。

むろん毒々しい五彩、おそろしい五色の混じり色だ。烈しい毒作用は、肉體の組織を、内部から、まづ臓腑の内側から、容赦なしに急劇に破壊したのだ。そして破壊しつゝあるのだ。
(ためだ！これ迄だ！)

さう、感じる意識が、暗ぐらと曇つてゆく。だが、曇つた意識が生への執着を捨てた時、奇意なこ
とには義龍が、にはかに明瞭な知覺を、再び取戻した。

(う、う、う……)

呻きながら、上體を擡げ氣味にして、だが、依ぜん尺取蟲の運動を續けて、遠ひ棚のそばまで匂ひ

寄つた。手が、伸びた。それは硯箱の中の筆を掴むためだつた。筆を掴んだ時、義龍は、じつに超人的な意力で、すでに死にかゝつた軀を、起して、坐つたのである。

くひ縛つた齒の間から、惡血がダラダラ流れ下つた。

肉體の苦痛はいふまでもないが、しかし最早、死を恐れなかつた。何物をも悔いなかつた。持たれた筆が、墨汁を含んだ。

片手が、料紙を引きよせた。

筆の先が、紙の上を動いた。

書かれた文字は、

三十餘年

守護人天

刹那一句

佛祖不傳

と、讀まれた。最後の偈である。

墨の乾かぬ文字の一端へ、ほとりと血の塊りが落ちた。黒ずんだ血ではあつたが、白い紙を染めれば、やはり赤く見えた。

紙が、血染めになつた時、ガクリと義龍の首が、前に垂れた。
だが、軀は、坐つたまゝだ。

呼吸は停まつた。永久に停止したのである。
心臓は動きを罷め、肉體は明らかに亡骸となつたにも拘らず、坐位は、くづれず、右の手指は、筆を持つてゐた。

義龍は、最後の偈を書きをはると同時に、死んだのであつた。
行年三十五。

永録四年五月十一日の眞夜中にかうして臨終の場に、何人をも近づけず、また誰一人にも、自分の最後を知らせずに、この世から去つた。

いとも寂しい死に方であつた。
しかし凄惨な鬼氣、惻々たる死ではあつたし、また飽くまで氣殺い往生ぶりだとも云へたらう。
おそろく彼は、

(どうせ腐つて腐つて、立ち腐れる肉體だ。自分で毒を投じて、破壊を早めたに過ぎない)
さう、諦めて、懐槍と苦悶を抑へつゝ、端然と死を遂げたものに違ひなかつた。

だが、道三の遺した「秘薬」を飲んだ爲に、かれ義龍が毒死を遂げたといふことは、やはり輪廻の

おそろしさを、人々に深ぶかと、感じさせたことだらう。

彼の死は稲葉山を震撼させた。

そして、美濃の國が、尾張から攻められる機ツかけが生じた。

義龍の一子、辰王丸は、元服して龍興といひ、今年が、満十九歳。

伊勢を扼す

(一)

ぐるぐる、膝に、白布を捲きつけてゐる。
繻帯だ。信長が負傷してゐるのである。

たゞし、斬られたのでもなく、刺されたのでもなかつた。

落馬して、膝關節を捻挫して、大腿骨の下部分と、脛骨の接ぎ目の邊に、骨折まがひの、ひびを
入らせたといふ負傷なのであつた。

「む、さうすると、まだ痛むな」

と、信長は濃姫夫人に云つた。

「お痛う御座いますか」

「痛しよ」

「これくらゐでも、お痛みで御座いますの？」

「痛いと言つてゐるではないか」

「あら、これくらゐでも？」

「痛いつたら」

「あアら、いけませぬこと！」

「いけないのは俺の方だ。もつとそろくやつて呉れ」

「このくらゐに、で御座いませうか？」

「まだ。もそつと柔々」

「貴方。——こんどばかりは随分お懲り遊ばしたでせう？」

「幅跳びをか？ 懲りるものか俺が」

信長は、横に寝轉んで、濃姫夫人に按摩をさせてゐるのだつた。

骨折も、捻挫も、醫師の手當でほゞ全治したが、治つた豫後が、まだ本當ではなかつたので、揉療

治をつつけてゐた。で按摩は、たれより濃姫夫人が上手だつた。

どうして落馬したかといふと、れいの、手づくり誤ちの怪我だ。

まつたく信長の落馬は、一向に珍しくない。おや、またか、ぐらゐに頻繁なのである。さう頻々と

馬から落ちるのは、つまり猿が——といつても此猿は、本物の方で、決して人間の猿を指すわけでないけれど上手にまかせて木から墜落するやうなもので、誰の所爲でも無い。御自分が御苦勞様の怪我であり、負傷なのである。

信長の落馬は、大抵の場合、障碍物の跳び越え損ひから起つた。

障碍物は、いろくで、川や濠割は勿論、土手よし、垣よし、樹木よし、何でも結構なのだ。

だが、こんどみたいは大失敗は初めてだつた。どうしたのかと云へば、跳び越すのは到てい不可能だと思はれてゐた城下の或る川を、つひに跳び越えようと試みた。信長に見れば毫しも氣まぐれや、その時の拍子などではなく、日頃から目論見を、いよく實行に移したのであつた。無理な川幅は解りきつたことだから、もとより失敗は覺悟の前。したがつて、今、するぶんお懲り遊ばしたでせうと、濃姫夫人に云はれても俺が懲りるものと答へたのは、嘘や、街ひや、瘦我慢ではなかつた。

「治り次第——」

と、信長が云ひかけた時、縁先の庭にゐた猿が、

「お殿様は、打ちどころが悪くて、たとひ其儘往生なすつたにしてもですね、お懲りになるなんて事は無いですよ奥様」

と、云つた。

「あらまあ、厭なお猿！」

と、美しい顔を擧めて、

「縁起でもないことを……」

濃姫は、おぼえずさう呟くのであつた。

だが、猿はお辭儀をして、

「縁起の方で、廻り路をして、よけて通ります」

と、云つた。

(二)

「猿がですね」

と、つゞけて、

「一ばんよく見てゐたのですが、悪い縁起は除けて通つても、あの水際の杭だけは、ほんたうにあぶなかつたですよ。あすこで、もう少し馬の圖う體の重さが、正味に掩ツかぶさつて御覽じろだ、お殿様のおみ足はですな、ちぎれて飛んじましましたです。全くな、ほんのもうちよつとツて、所でした

「がなあ！」

「馬鹿野郎め！」

と、信長が云つた。

「敢て叱る時、罵る時だけでなしに、單に呼びかける時に往々、信長は、この馬鹿野郎といふ言葉を使ふ。」

「は？」

と、猿が會釋をした。

「まるで、俺の脚が、千裂れて飛ばなかつたことが、残念だといふみたいだ」

「さう聞きましたかな」

「あれだよ濃姫」

「ほんに、酒あ酒あと、してゐますこと！」

猿が、

「とにかく、運の神様にしても、縁起の佛様にしても、偉い人に逢へば、莞にこします。そりあ請合ひ、太鼓判、ほんくです。嘘なら御らんない、うちのお殿様ですよ、結局は、運命の神は微笑むつてなことになる。それが苦い顔をされたり、地獄の方へ突き落されたりするのは、要するにで

すね、人間が出来とらんからでございませよ。かなり偉さうに見えても、中味の成つちよらん者が、意地の悪い神様とでも擦れ違へば、手近な話が、稻葉山の義龍ですア、はい」

濃姫が、

「おほほほ、相變はらすお猿が、面白いことを！ 義龍が、意地わるの神様と擦れちがつて、地獄へ、つき落されたといふのね」

猿が、平べつたい石の上で、またお辭儀をして、

「左様で、御座いますですよ。意地わるの神様に違ひ無からうぢやありませんか。なぜ道三公の御調合の毒薬を、義龍に飲ます手際などは相當なものです」

と、云つた。

濃姫夫人は、また笑つて、

「おほほほ、相當な手際、ですつて！」

と、信長の顔へ、目を遣る。

猿が、

「あれで、義龍がもつと本當に人物ならすね、あの劇薬の一包を、たゞ一口にぐいつと飲みなどは致しません。舌の先で嘗めるやうに、一服を幾日ばかりで、チビチビやりますよ」

信長が、

「わはは、チビチビ遣つたら、癩病が治つたかも知れない」
「はい、そこですよ」

と、猿が低い鼻をうごめかす。

「なんだその面は、鼻の穴を擴げてゐないで、柴田と佐久間を呼んで参れ」
「御用の筋は？」

「軍の評定だ」

「こゝで、なさるのですか？」

と、猿は、庭の敷石の上を、叩いた。

「上方見物の内證が、美濃へ漏れたからな。却て、かうした明け放しの場所の方が宜いのだ」
信長は、さう云つたのである。

(三)

どれほども待たないうちに、猿面藤吉は、重臣の柴田權六と、佐久間右衛門を、呼んできたのであ

つた。

兩人とも、ちやうど出仕して、本丸の用部屋にゐたので、すぐに伴れて來ることが出來た。庭先に猿が戻つた恰好を見ると、さながら自分が重臣の筆頭として、來るべき美濃攻撃の最高作戦を主宰するやうな、そんな顔つきで、二人の重臣の前になつて縁先までくるのだつた。

「さあ、そこへ」

と、猿が云つた。

「そこへ？」

と、權六は、猿の手の動くのを見ると、飛び石の上を指した。

權六は、室内を、ちよつと眺めたが、信長は、上れとも何とも云はないので、

「ここか？」

「そこだ」

と、猿は頷いて、應揚に、

「坐らしめ」

と、氣取つた聲を出す。

「何だと？ 汝の指圖は受けんぞ」

権六は、むつとして云つた。

「用があるのだ」

と、猿は、信長の聲色を、そつくり真似たのである。

「畜生、生意氣な真似をしをると、酷いからさう思へ」

と、いふ権六へ、信長が、

「城を一つ、築かうと思ふが、其方に言付ける。工事をだ。場所は墨俣」

「え？ 墨俣——美濃ので御座りますか？」

だしぬけだつた——といふのは猿は軍評定のことを、ひと言も話してなかつたからだ。

「他所にも在るか知らんが」

と、信長は微笑して、

「他所國の洲俣や素股には、用が無い。美濃と戦を始めるのだからな」

「おゝ、然らば愈々御開戦で——」

権六の眉は、昂然とあがつた。戦ひたくて、腕が鳴つてゐたのであつた。

「坐れ」

「は」

樂田と佐久間は庭石に坐した。

「だがの、晝寝をしながらも出来る戦だから、その積りでな」

と、信長が云つた。

「なんと仰せらるゝ？」

と、権六が訊き返した時、右衛門も、

「義龍亡しとは申せ、美濃は多士濟々、さすが過去に於いて道三公の御武略に、驚陶されただけあつて、決して決して、侮り難き強敵で御座りまするに？」

と、尋ねた。

「はッは、相變らずだの」

「え？」

「頭の悪いことがよ。兵馬が、強いから、晝寝をして緩々、緩々と戦ふのだ」

「妙なことを仰せられます、士馬強盛ならば、なぜ晝寝いたすので御座りますか？ 干戈ひとたび動かば、晝寝どころでは御座りますまいに——」

と、佐久間が云つた。

「驚いたな。そなたのが掛値なしの石頭だ、そんなことでは、晝寝も満足には出来ぬぞよ。おれの云

美濃攻めは、決して急がない戦なのだ。速戦して、兵士を損じては、後の都合がよろしくない。美濃なんぞは、ほんの序の口なんだから」

と、さう云つて信長は、

「猿。——一益を呼んで来」

(四)

何事にも、どんな場合にも、一言辯じないことには濟まされぬといふ性分の猿が、めづらしく黙まりで立去つて、やがて瀧川一益を伴つて、ふたたび現はれた時にもやはり黙々と、まるで啞者みたいな顔と、手と、指先を口の代りにして一益に、何やら意志表示をやつたが、なにが扱て、人幾層倍も口まめなのが、なぜそんな真似をするのか、さすが智慧者の一益にも、解りかねたと見えて、首を傾げてゐるので、信長は、可笑しくなつて、

「おい一益、どうした？」

と、一向に殿様らしくない気軽さで、聲をかけると、

「は、なんで御座りますやら、此男どうも變で御座りますな、手真似など致して！」

さう、云つたので、柴田も笑へば、佐久間も吹き出した。信長は、

「そ奴は名に負ふ猿だもの、變でなかつたら却つて訝しいよ一益」と、答へた。

「なるほど、左様で御座りまするか」

瀧川一益は、江州者で、江南の六角家を浪人して、信長の家來になつたのは、桶狭間の戦の忽れほども前でなかつた。だから極く新參者で、猿面藤吉についても、むろん噂はよく聞いたが、面識は、いくらも無かつた。たゞし、新參者といつても、名ある武士だつた瀧川は、仕官と同時に、相當重用されたし、桶狭間の軍功も抽きんでゐるから、今では重臣待遇を受ける、身分になつてゐるのであつた。

一益が、坐ると、信長は猿へ、

「なんの真似だ？」

と、訊くと、

「情け無いですな」

「何だ？」

「お殿さままでが、わたしの心遣ひを——お解りにならないのですか」

「なにが心遣ひだ？」

「御理解が無いとは心細いな。桶狭間以来の大切な軍評定です。根本基本の作戦會議ですよ、はい」

「どこで覚えた珍語だ？」

「殿様！ 珍語は情け無いですね」

「また情無いのか？」

「さういふ大切な作戦會議を前にして、ですね、瀧川殿の頭が、ですね、この猿めの餘計な駄辯のために、いやに混がらかつては、お氣の毒でもあり、又お爲にも悪からうぢやないのですか。決して餘計な、駄辯どころではないのですが、理解が無いと、玉も瓦に見えますからな」

「ふふふふ、玉だ、玉だ！」

と、信長が、笑ひ出した。

「あれだー いけませんよ御殿！ 殿様の玉は、精々よくつて鐵砲玉です。無鐵砲玉、素鐵砲玉と、玉にも色々ありますからねえ」

「うふふふ、瓦では無いよ猿は！」

信長は、いとも心地よささうであつたが、柴田と佐久間の兩人は、馬鹿々々しく感じた。——玉も瓦もあるものか。

(敵が強ければ晝寝だ、と仰有るし……)

だが、何しろ主君は、桶狭間の大勝者だから、絶対に頭が上らない。

信長は、莞々、笑ひ顔を納めずに、

「権六、美濃を攻めるには墨股だが、墨股に築くためには、桑名が要る」と、またも妙なことを云ひ出した。

(五)

権六は、赤黒く光る額に、皺を寄せた。

「くあな？ くあなと申しますと？」

訊いたから、堪らない。

「何だ、その縦ツちよの皺は？ 馬鹿野郎ツ！」

と、信長は呶鳴つた。

この馬鹿野郎は、本當に叱つたので、猿にむかつて云ふ場合とは大違ひだつた。

この主君にかつては、譜代の重臣も家老職も、轡とりも、草履とりも、てんで差別といふものが

無いのであつた。

「權六つ、おれの家來は、力業だけでは勤まらんど、アンボンタン！」

なんと云はれても、末森以來、稻生合戦の方、怒るわけには行かない權六だつた。信長を滅ぼして、弟勘十郎を立てようとした謀反の張本人だから、むろん首が幾箇あつても足りないほどの大罪を犯したわけだが、それを赦免して貰つたばかりか、相變らず重臣の出頭人でをられる、といふ大恩を蒙つてゐるのだ。

「佐久間はどうか？」

と、信長が、右衛門に質問を向けた。

「は。——くあなで御座りますか？」

佐久間は、さう云つたものゝ、實は權六同様、見當がつかないのである。

「阿呆！ そなたも、カサゴの口だな」

と、信長は云つた。

「はて、カサゴと仰有りますと？」

「カサゴも知らんのか？」

知らないでは不良いと思つたが、知らないのは解らなかつた。で或ひは——と猿面の能く用ひる手

の、當て推ツぼうを模倣して、

「鐵砲と一緒に傳來致したとかいふ、悪病を、親の胎内から貰つて參つた子だ——とでも仰有りまするか？」

「馬鹿つ、それは瘡ツ子だ。カサゴといふのは魚だ。眼と眼の間が凹んでゐて、背鰭と尻ツ尾に、ひどい棘がある。色は緑いろで、茶色の斑が混じつてゐる」

信長は、さう教へたが、教はつた方では、尙さら解らなくなる。

「さう致しますと、權六も、手前も、そのカサゴと申す魚だと、さう仰せられるので御座りますか？」

「三十年年、なにをして來たのだ？ カサゴといふ魚は、一名を、アンボンタンともいふんだ」

信長が、さう云つた時、うしろから濃姫夫人が、

「もう貴方、大ていに遊ばしませ！」

と、諫めた。

だが信長は、その言葉を、文字通り尻に聞かせて、

「肝腎な話だ、なあ猿！」

「くあなですか」

と、額を突き出すと、

「そちはカサゴでは無いよ」

と、信長が云つた。猿は、即座に、

「素股桑名の焼蛤でせう」

と、答へた。

「さうだ、その桑名だ。伊勢の桑名だ。だから、一益を呼んだのだ。出来したぞ猿。賞めて遣はす。どうしても瓦では無いよ」

「あやおや！ たゞ賞めて頂くだけですか。墨股も桑名も、どちらも河原ですがなあ！」

「音なねだり方をしないで、待つてゐろ」

「たまには少ツびりぐらゐる！」

「わは、ゝゝゝ！」

ひどく信長の氣に入つたのは、瓦と河原の洒落のみではなかつた。長良川原の墨股は、美濃中央の要衝だし、木曾川河口の桑名は、伊勢を扼すに足る形勝の地だったのである。

(六)

柴田権六は、胸中を、もたぐさせて、

「殿、これが肝腎のお軍評定で御座りまするか？」

と、云つた。

「さうとも、肝腎要なのだ。緊かりして呉れ。ぼやぼやしてゐては、駄目だぞよ権六。右衛門も、さうぢや」

信長は、おどけてゐるやうに見えても、實は大眞面目なのであつた。

「尾張がー織田が、天下へむけて擴がらうとする發足點だ。第一歩だ。物事は、踏み出しが悪いと、どうにもならんよ。美濃を奪るためには、長良川原の墨股に城を一つ、築いて、それから晝寝をすることだ」

「館つ、また晝寝で御座りますかッ？」

と、右衛門が叫んだ。

「またとは何だ？ 黙つて聞け、カサゴ野郎！ 晝寝をするためには、だが木曾川口の桑名で、蛤の舌鼓といふのを、うたないと不可んだ。いゝか？ 少しは解つたらう？」

「いゝえ、一向に！」

と、権六が、眼れ顔を續ける。

「始末の悪い、古カサゴだな！」

信長は、なほも毒舌を浴せてから、

「考へて見る、一気に美濃を奪らうとすれば、尾張中の兵一人残らず攻め込んで行つても、足りはせんよ。がら空になつた留守へ、長島本願寺の兵が、押寄せて來たら怎うなる？ おまけに桑名から向ふの、伊勢の大軍にでも攻め込まれてみる、清洲も那古屋も古渡も、城も濠もあつたものかよ。だから美濃攻めだ、決戦を急いでは駄目だ。つまり、墨股で晝寝をするに限るのだが、この晝寝は桑名の要害を取りきつて、長島の本願寺と、伊勢の北畠の出口を、塞がないことには、とても、出來つことはないといふ晝寝なのだ。そこで先づ、焼蛤だが、この舌鼓は、一益——」

と、瀧川へ、

「其方に申し附けるぞ」

と、云つた。

命じられた瀧川一益が、

「は！ 身に餘る重任ながら、粉骨碎身、仕るで御座りませう」と、答へた。

「一益なら、きつと仕果せる。——するぶん、難しい仕事には違ひないけれど。それに較べると、晝

寝支度の方は、樂だよ。脳味噌の足りないカサゴどもにも、どうにか出來よう。なあ權六、右衛門。

——墨股の築城は、そなた達のアンボンタンに、しかと言付けたぞ」

だが、さう云付かつた兩人は、

（アンボンタンが宜い面の皮だ！ 墨股といへば、美濃の國の中央で、いはゆる四通八達の、交通上の大切な場所だ。敵の國の中央に、城を築くことが、何で樂な仕事なものか？）

と、思つたが、もう追ツつかない。

すでに、命令は下つたのである。

この妙ちくりんな庭先の會議こそ、じつに重大な意義をもつものだった。

それから數日後のことであつたが——

木會川の下流、水漫々と宛ら入江のやうに湛へるほとり、尾張から長島へ渡す渡船場で、船待ちをしてゐる一人の浪士——供は若黨たつた獨りきりでも、身装といひ、腰の大小といひ、堂々たる骨格に、まことに相適はしい立派なものだった。

立派やかなのは道理、この浪士こそ、桑名の焼蛤に舌鼓を打つといふ重い役目を、ふりあてられた瀧川一益、その人であつたのだ。

長島といふのは、伊勢灣頭、木曾川の下流と、揖斐川の下流とが、これを左右から抱きつゝ、海へ流れこむ位置にある、その三角洲をさすのだ。

木曾川の下流は、さらに鍋田川、筏川、蟹江川などに分れて、木曾島、稻元島、飛島といふ三つの三角洲を形成してゐた。

つまり、長島とも、四つの島があつたわけだが、その中で、最も大きいのは長島で、南北およそ四里、東西一里——。

面積四万里といへば、かなり広い。この長島にくらべると、木曾島は約三分の一。稻元島と飛島はつづれも長島の半分くらゐ。

すると、この四箇の島の面積の合計は、ほぼ十万里だ。これが總て、典型的な三角洲で、地味豊饒見渡すかぎり肥沃な耕地であり、美田でもあつたのだから、相當なものだ。

相當なものだなど、——なぜ説明したかと云ふと、この四つの島が、皆、長島本願寺の領分だからである。

のみならず、寺の領地は、飛島の北、蟹江新田へも擴がつて、織田領と地續きになつてゐた。で、まづ第一に、此の事柄を、頭に入れて置く必要があらう。

ぐわんらい長島は、木曾島と共に、伊勢の國に地籍を有つてゐたし、稻元島と飛島とは、尾張の國の一部だつた。だから、長島本願寺の領地は、勢尾の兩國に跨つて伊勢の北畠氏と、尾張の織田氏のちやうど眞ん中に介在してゐた。そして北畠氏の被官たる桑名の城主、桑名三郎氏吉とは、しごく親善な間柄だつたので、いきほひ、その領地の發展は、東北の織田領へ伸びてゆくといふ、方向をとつてゐた。

してみれば、このことが、第二に注意されなければなるまい。要するに長島本願寺と、桑名は、味方同士だつたし、長島本願寺と織田とは、敵對關係にあつたのだ。

いま、瀧川一益は、渡船を待つて、木曾川を、長島へ渡つたのである。

そして、彼の浪士姿は、やがて本願寺の門前町に現れ、それから間もなく、服部左京の堂々たる居館の、大玄關に突立つと——

一益は、大きな聲で、

「頼まう」

と、吹鳴つた。

まさか正面玄關へ、いきなり行かうとは思はず通した門衛は、呆氣にとられたが、

「どうれ」

と、應へて顔を出した侍は、さすがに瀧川が尋常な浪人でないと感じたので、丁重に、
「いづれよりお越しか、御姓と、ならびに御用件を承はらう」

さう、云ふと、

「左京は、在邸かな？」

ぶツつに、一益が尋ねたから、侍は面喰つて、

「や、左京？」

「左京亮は居るか」と訊くのだ」

「左京亮とは、當屋敷の殿、服部左京亮様の御ことか？」

「いく人も左京亮が居るのか」

と、一益が微笑する。

「ちえ、無禮で御座らう！ わが殿を、何と心得るのだツ？」

と、侍が叫んだ。

「相變らず朋友と心得てゐる」

「な、な、何とツ？」

「喚かずとも、左京へ、左近が参つたと一言、云へば解るのだ」

瀧川左近一益と、服部左京亮とは、もと、近江の六角家の家中で同僚でもあり、親友でもある仲だつたのである。

(八)

服部左京亮は、長島本願寺の武力代表者だつた。

長島本願寺は、いふまでもなく大坂の石山本願寺の別院で、中部日本における一向宗——すなはち眞宗布教の本據であつたし、特に地元ともいふべき、伊勢、美濃、尾張、三河などの國々に散在する眞宗寺院に對しては、總元締め的位置にあつたから、統轄者として指令を出さなくてはならない。

で、各所に割據の武家勢力にむかつてさへ、拮抗を辭さなかつた長島本願寺は、それ相當の兵力を蓄へてゐたが、服部左京は、この兵力の司令に任せられたのだつた。

したがつて、長島で左京亮殿といへば、大した勢ひだ。

人は、「御堂の御家老」とも云つたし、また、「長島の大將」とも稱した。

その左京亮が、首を傾げて、

「なに、左京に、左近が来たと云へば、解ると申したのか？」
と、訊き返した。

「はい。身装はさまで、身苦しくも御座りませぬが、人相は至つて悪う見えまするし、なにしろ自分ひとり、供ひとり、たつた二人きりで御座ります」

「たしかに左近と申したか？」

「御記憶が御座りまするか？」

「昔なじみに、左近といふ男は、あるには有つたが……とにかく通せ。會つて見ようぞ」
暫くして、對面の間へ出て見ると、

「なんだ、いやに待たせたではないか？」

と、浪人が嗚鳴つた。

「おゝ左近か！」

「先日から左近だと云うてゐる」

「む、これは珍しい」

「えらく出世したのう」

「一別以來、何年になるかな」

左京亮は、さう云つてから、急に氣が附いたやうに、威儀をつくろつて座に直つて、

「一益。若干は心して欲しいぞ」

「何を？」

「瀧川つ！」

「何だ？」

「それ、それが不可ん。すこしは言語といふものを慎んで貰はう」

「今は、身分に懸隔があると云ふのか」

「決して昂ぶる譯ではないがな」

「だが、謙遜するといふ恰好では無ささうだ」

「はツは、仕様の無い奴ちや。過去の親友、差し向ひならば苦しいが、家來どもの手前もある
での」

「家來どもは退らせたら怎うだ」

「わはツは、まあ宜いわ。時に一益、お許は尾張の信長に仕へて、だいぶ重く用ひられてをると聞
いてゐるが、いつ浪人した？」